

815.H398n
384



作文立案式は靈匠が
多年語法苦學の意匠に啓
發せしにて悉く古書中散文
の格例に徴し數回の訂正を
經て思ひ定めたるなりこ
はげだし千古未だの一新創
聞たり その概略を出だし
たるを擧げて示さんとこれ

第一章 作文立案式

ならびに活語暗記法圖式 また動詞の性格ならびに自性

令性被性の辨別およびその暗記法圖式自令被對照表 ま

た動詞の存在活格 また動詞の崇敬格並の諸法則學理

はこの前編において順次逐條悉く講述し竟へつ よつて

後編に歩を轉じ文章論すなはち(詞の結合法)の範圍に説

き及ぼしてん

文章論

第一章 作文立案式

作文立案式とは文作き歌詠むにそが草案を起す筆の立

てかたをいふ

さて、その案を立つる方法は折に觸れ事に臨みて人その

腦裡に鑑識する眞影實況を見るもの聞くものにつけて

七百七



261056

文章組立法

文體結構法

が調子の式法な
の二部となしその語尾に添
はる聲辭の性質によりてこ
れを定む

名詞の格

動詞の法

連語の法

の三種となしもつてその
名詞の格の類別と動詞
の法の類別とを正確に認
尾の聲辭の効用をもつて
判定しその格法を推測開發
的に秩然たらしめたるは實
に本編をもつて嚆矢とす世に
在り稱れたる從來の語學
書新刊の文典とせば、
かつてその類別を見ざるこ
ころたり、これけだし日
本文法論書上に一大至願
を與へ國語學の一大進歩
を啓發せりと言はんも敢て
過言には、あらざるべし

たゞ口にうたひ筆にかき寫すに過ぎざるものなり、され
はその情の感ずるまに、意の動くまに、思ひつける
趣向を先づ平語に短く書きとり然して後に歌ならばそを
先づ言文一致體に五七の調べなり七五の調べなり長短各
種の歌の體にと、のへ文ならばそを同しく言文一致體に
先づ文體の結構を記事なり論說なり各種の文の體にと、
のへ更にまた、それを歌ならば歌語に修飾し文ならば文
語に修飾するを作文立案の式法とす
さて、その眞影實況を筆に寫眞するに、あたり事實が素に
成るあり、思想が素に成るあり、事實が素に成り物を見
また事を聞きて、その在りの儘に書き寫す文體を

記事文

といひ、思想が素に成りて自己の意見を書き替はず文體

を

論說文

といふ、およそ文體は種々有りといへどもこれを概括し
て、その性質を辨別せば、記事論說二體の外に出でざるも
のとす

けだしその記事體に書くも、論說體に書くも、つまり腦裡
に認識する見聞上の眞影實況を寫眞しそが思考想像を畫
き記すが目的なれば成るべく達意に成るべく簡明にたゞ
眞にせまり實にそむけざるやうに書くを通法とす
さて、その達意簡明によく、その眞を寫しよく、その意を盡
さんには、たゞこれが法則を密に究めずは有るべからず

從來國文家漢文家など
て眞正の文章組立法の
何たるを辨知せず、文體
結構法をもつて文章組
立法と心得ひがめて世に
用ふるあり、是れいたく、
いふことなり、何とせば
組立法は聲辭すなはち
「てにをば」の効用により
名詞の格と動詞の法
とを辨別合はせて意圖を香
き表はすべき、詞辭組立
の方法を謂ひ、結構法
は筆を立つる準備に基づき
抑揚頓挫とに於ける文
體結構の方法を謂ふな
もつてなり、これまた、藝
臣が一新發明に係かり本
編をもつて嚆矢とす

そのこれを講究するにつき方法の性質により部門を別か
ちて

文章組立法

文體結構法

の二部となす

第二章 文章組立法

文章組立法とは靈辭すなはち(てにをは)の媒介に據りて
名詞と動詞とをあひ結合とあひ關係せしめて思考を完全
に書きあらはすべき詞辭組立ての法則をいふ
たゞと前編の詞辭論すなはち(詞の成立法)はたゞ觀念
を言ひ表はすに止まる一詞一辭の上に就ての諸法則を
論ずれどもこの後編の文章論すなはち(詞の結合法)は

名詞の格を斯の如く三
類に大別し更に主格名

辭の配置に準じ詞と詞とがあひ連絡せる觀念の集合す
なはち思考を書き顯はし意味を盡すに足るべき組立て
の諸法則を論ずるものと知るべし

こは、その語尾に靈辭を添へて各詞の格と動詞の法とを
さし定め、もつてその掛け合はせ組み立ての上につき先
づそが格と法とを豫め別かちて

名詞の格

動詞の法

連語の法

の三類となす

第一節 名詞の格

名詞の格とは章句結構の上における名詞の配置につきて

詞を八種に類別して學理を啓蒙し法規を秩然たらしめたるは其のれが一新創唱に際かり實に本會開業録をもつて嚆矢とす

その地位資格を判定する規定をいふ 地位の資格により類別して

主格名詞

地位格名詞

目的格名詞

の三類となす

第一則 主格名詞

主格名詞とは語尾に「がのよはもぞなんやかこそ」の起首靈辭が添はりて文意を起因と主格たる地位にくらゐると動詞の活用を左右すべき權力ある名詞の格をいふ ゆゑにこの名詞の格は照應法中起結照應の部において起首法と成るなり こそ更に効用上の性質につき細別とて

舉止主格

招喚主格

反對主格

對稱主格

指示主格

詠歎主格

疑問主格

拔群主格

の八種とす

第一目 舉止主格

舉止主格とは「是が其の」どやうに物の動作運用における舉止の意を呼びおこすに用ふる主格名詞をいふ たどへ

は

花が咲く

櫻が散る

鶯が鳴く

鳥が飛ぶ

人の来る

秋風の吹く

月の出づる

雪の降る

なぞやうに「が」の靈辭が語尾に添はり舉止の舉動を表はし示す名詞の格をさす

第二目 招喚主格

招喚主格とは誰よ彼やとやうに物を招き喚ぶ意を呼び

おこすに用ふる主格名詞をいふ たとへば

君よ來たまへ

車夫よ車もてこ

渡守よ舟よせてを

これや來ぬか

使の者や返事もて往け

なぞやうに「よや」の靈辭が語尾に添はりて他より招喚せらるゝ舉動を表はし示す名詞の格をさす

たゞし上の「が」の靈辭と「よや」の靈辭との區別はたゞ

自動と他動との差別のみこそ有れその意味あひ類せる

ものと知るべし 是は「が」の方は自動の性質「よや」の

方は他動の性質なれど効用の上においては、やはり攀止の意に出づるをもつてなり

第三目 反對主格

反對主格とは「是は其は」とやうに彼と是と物のあひ異なるを區別とその反對の意味を呼びおこすに用ふる主格名詞をいふ たどへは

- 吾は登る
- 彼は下る
- 雁は歸る
- 燕は來る
- 夏は暑し
- 冬は寒し

鳥は黒し

鷹は白し

などやうに「は」の靈辭が語尾に添はり反對の舉動を表はし示す名詞の格をさす

第四目 對稱主格

對稱主格とは「其も是も」とやうに彼と是と物のあひ同じかるを並列とその對稱の意を呼びおこすに用ふる主格名詞をいふ たどへは

- 吾も下る
- 彼も下る
- 雁も歸り
- 人も北へ歸る

鳥も黒と

熊も黒と

などやうに「も」の靈辭が語尾に添はり對稱の舉動を表はし示す名詞の格をさす

たゞし上の「は」の靈辭と「も」の靈辭との區別は、その性質まつたくあひ反せるに有りと知るべし。そは「は」の方は反對の性質「も」の方は對稱の性質なるものなれはなり。而して「は」「も」「も」共にその性質二意に涉り他に兼ねるところ有るをもつて意味輕と心得べし

第五目 指示主格

指示主格とは「是を彼を」とやうに物の數多く有るが中その一つを指し示す意を呼びおこすに用ふる主格名詞を

いふ たとへは

あの嶺ぞ筑波山なる

彼を親じき友

これを吾が友なる

此所ぞ一所懸命なる

これを吾が物

などやうに「ぞ」の靈辭が語尾に添はり指示の動作を表はし示す名詞の格をさす

第六目 詠歎主格

詠歎主格とは「彼なん」「是なも」とやうに相手の人に對し傍の物を指して是なもと親愛の情を示す詠歎の歎聲に呼びおこし物を指し示すに用ふる主格名詞をいふ

たゞし、この「なん」の靈辭は歎聲の「なも」にて、すなはち「ナア」を發する長息の聲を「ハモ」を發する悲哀の情に迫まる聲を合はせて組み立てたるものと知るべし
ゆるに古言に「なも」といへり
たどへは

君よあれなん富士の山なる

これなん都鳥

今日なん旅より歸りぬる

それなんわが望むところ

汝よ彼は吾が學友になんある

人なも來ぬる

などやうに「なんなも」の靈辭が語尾に添はり詠歎の動作

を表はし示す名詞の格をさす

たゞし上の「ぞ」の靈辭とこの「なん(なも)」の靈辭との區別はたゞ「ぞ」の方は單にその一つを強く指し示す意味にのみ用ふれども「なん(なも)」の方は相手の人に對し親愛の情を含めて指し示すに用ふるものと知るべし
そは「ぞ」の方は指示の性質「なん(なも)」の方は詠歎の性質なるものなればなり
而して「ぞ」も「なん(なも)」も共にその性質一意に出で、他に兼ねるところ無く専らなるをもつて意味重しと知るべし

第七目 疑問主格

疑問主格とは「彼や誰」其は何か」とやうに物を問ひかくるその疑問する意を呼びおこすに用ふる主格名詞をいふ

たとへば

花や咲くらん

月や出づらん

彼や誰なる

何か宜しき

今何所にか居る

なほやうに「やか」の靈辭が語尾に添はり疑問の動作を表はし示す名詞の格をさす

第八目 拔群主格

拔群主格とは「吾こそ君こそ」とやうに物の數多く有るが中にその一つを抜き出だして群にぬきんでたる意を呼びおこすに用ふる主格名詞をいふ

たゞし、この「こそ」の靈辭はそれが陰にあひ悖戻すべき反語の意味を對し含めるものと心得べし。ゆゑにその語尾には、かならず「と」の悖戻接續の辭が添はる意を籠め含むものを知るべし

たとへば

いまだ雪こそ降れ(と)春は春なり

春こそ立て(と)いまだ鶯も鳴かず

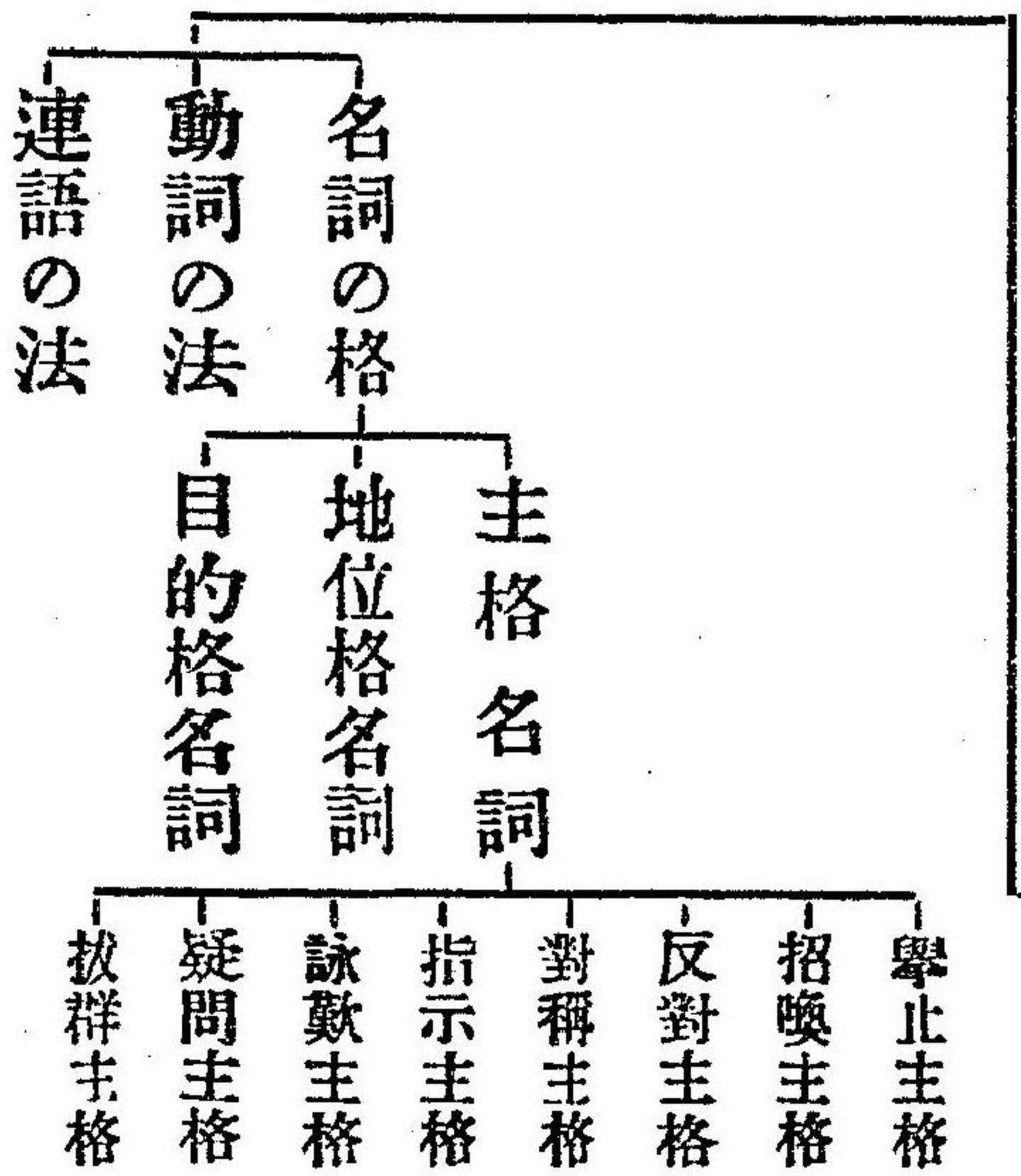
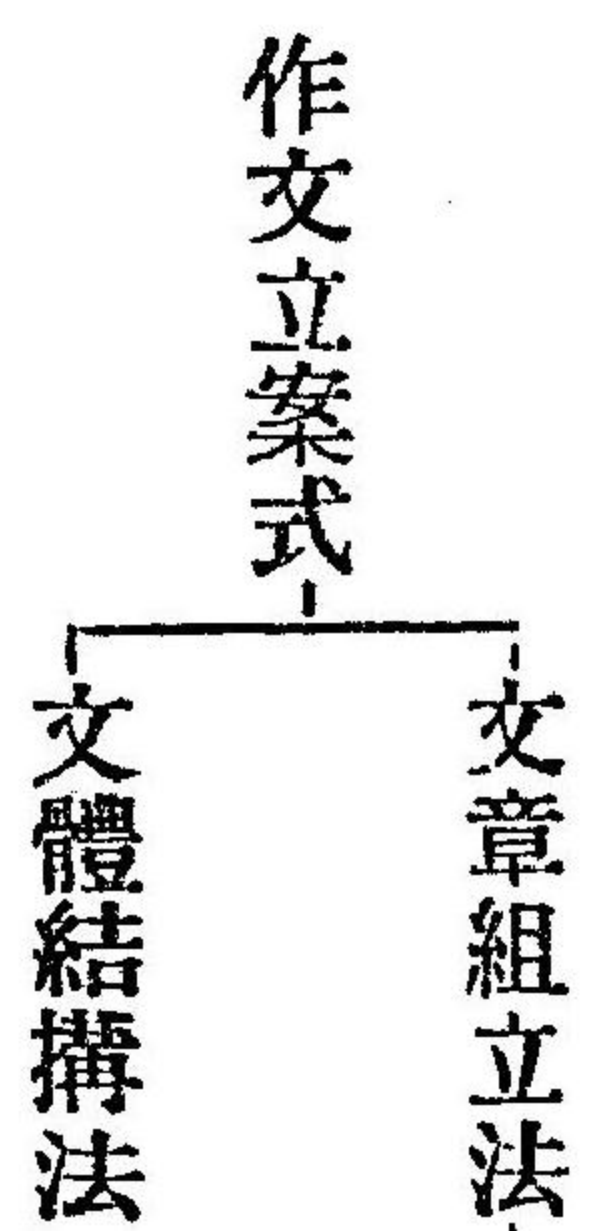
試験には君こそ及第すべけれ(と)われは落第す

べし

好きこそものゝ上手なれ(と)嫌ひならば出來まじなどやうに「こそ」の靈辭が語尾に添はり拔群の舉動を表はし示す名詞の格をさす

たゞし上の「ぞ」の靈辭と「こそ」の靈辭との區別はたゞ「ぞ」の方は單にその一つを強く指し示すのみの意味と「こそ」の方はこの一物のほかに物なきが如く無比無類で有りといふ意味との差別ありと知るべし。そは「ぞ」の方は指示の性質「こそ」の方は拔群の性質なるものなればなり。

上に講述せる作文立案および主格名詞の類別を系線表圖に表明しもつて一目瞭々その靈辭所屬の語尾を詳かにせしめ記憶の便に供ふる左のごとし。



第二則 地位格名詞

地位格名詞とは語尾に「に」へよりからまで「の關係靈辭が添はりて主格名詞とあひ關係しその所作の地位すなはち動詞の活きの由て係かる場所と時期とを指し示すに用ふる名詞の格をいふ。

地位格名詞を斯く四種に分類し學理を詳かにしたるもそのれが發達に係かるなり。

たゞし時期を示す方は効用が副性だちなる有り それ
をは副詞の部に組み入れて文章組立上の補修法と成
るものと知るべし 混すべからず
細別して

歸着地位格

方位地位格

發程地位格

到着地位格

の四種とす

第一目 歸着地位格

歸着地位格とは語尾に「に」の靈辭が添はりて歸着の意味
を言ひ表はす地位格名詞をいふ たどへは

花が山に咲く

紅葉が風に散る

月は空に照る

雪が庭に積もる

山へ遊びに往く

人が家に歸る

午後四時に來よ

などやうに「に」の靈辭が語尾に添はりて歸着の意味を表
はし示す名詞の格をさす

第二目 方位地位格

方位地位格とは語尾に「へ」の靈辭が添はりて方位の意味
を言ひ表はす地位格名詞をいふ たどへは

吾は公園地へ往く

日本から西洋へ赴く

北をさして故郷へ歸る

右へ向け左へ除けよ

汝此方へ來よ

その事は來一月へ送れ

などやうに「へ」の靈辭が語尾に添はりて方位の意味を表はし示す名詞の格をさす

第三目 發程地位格

發程地位格とは語尾に「よりから」の靈辭が添はりて發程の意味を言ひ表はす地位格名詞をいふ たどへは

大陽は東より出づ

外國より日本に歸る

古より今に至るまで

東京から西京へ往く

九時から三時まで

などやうに「よりから」の靈辭が語尾に添はりて發程の意味を表はし示す名詞の格をさす

第四目 到着地位格

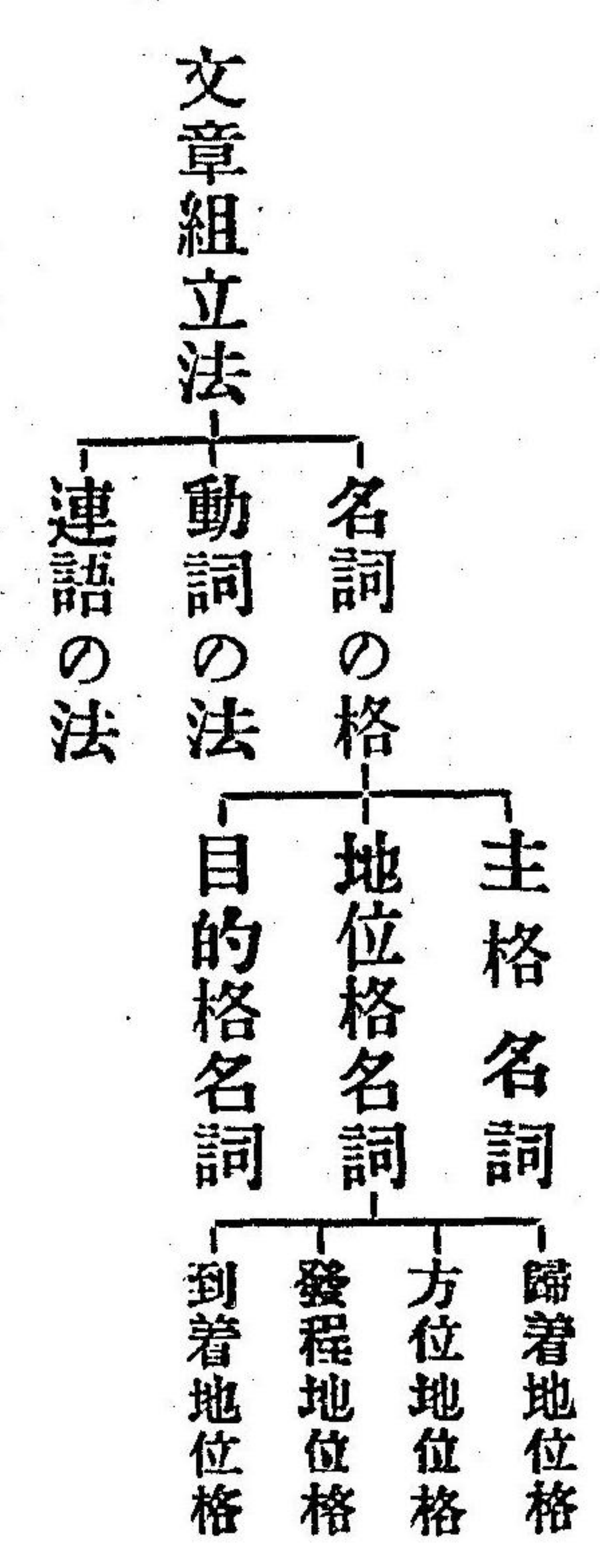
到着地位格とは語尾に「まで」の靈辭が添はりて到着の意味を言ひ表はす地位格名詞をいふ たどへは

彼は横濱まで往けり

此所まで來よ

西京より東京まで何里ある

朝から今まで待てり
 あの橋の所まで送らん
 などやうに「まで」の靈辭が語尾に添はりて到着の意味を表はし示す名詞の格をさす
 上に講述せる地位格名詞の類別を系線表圖に表明しもつて一目瞭々その靈辭所屬の語尾を詳かにせしめ記憶の便に供ふる左のごとし



目的格名詞を新く二種に分類し學理をさはめたるもそのれが啓發に係かれり

第三則 目的格名詞

目的格名詞とは語尾に「を」の關係靈辭が添はりて主格名詞とあひ關係し、その所作の目的すなはち動詞の活きの目あてたる事物の使用と憑據とを指し示すに用ふる名詞をいふ 細別して

- 使用目的格
 - 憑據目的格
- の二種とす

第一目 使用目的格

使用目的格とは語尾に「を」の靈辭が添はりて事物の使用たる意味を言ひ表はす目的格名詞をいふ たとへは
 人が花を手折る

風が紅葉を散らす

吾は月を眺む

友が雪を踏み分けて問ふ

弓を射て鳥を捕る

なごやうに「を」の靈辭が語尾に添はりて使用せらるゝの
意味を表はし示す名詞をさす

第二目 憑據目的格

憑據目的格とは語尾に「を」の靈辭が添はりて所作の據り
どころとなる事物たる意味を言ひ表はす目的格名詞をい
ふ

たゞと、この憑據目的格と上の使用目的格との差別は、
たゞその事物を使用する意に出で、動かしか能ふとその

事物の憑據の意に出で、動かしか能はざるとの差異ある
のみ ゆゑに語尾に同じく「を」の關係靈辭が添はり所
作の目的となる意味においては差異なきものと知るべ
し 然れども、その効用の上に別あるにより「し」の印を
もつて、その差を辨するなり

たゞへは

風よ花を除きて吹け

川を渡り山を超えて往く

吾は故郷を出で、東京に居る

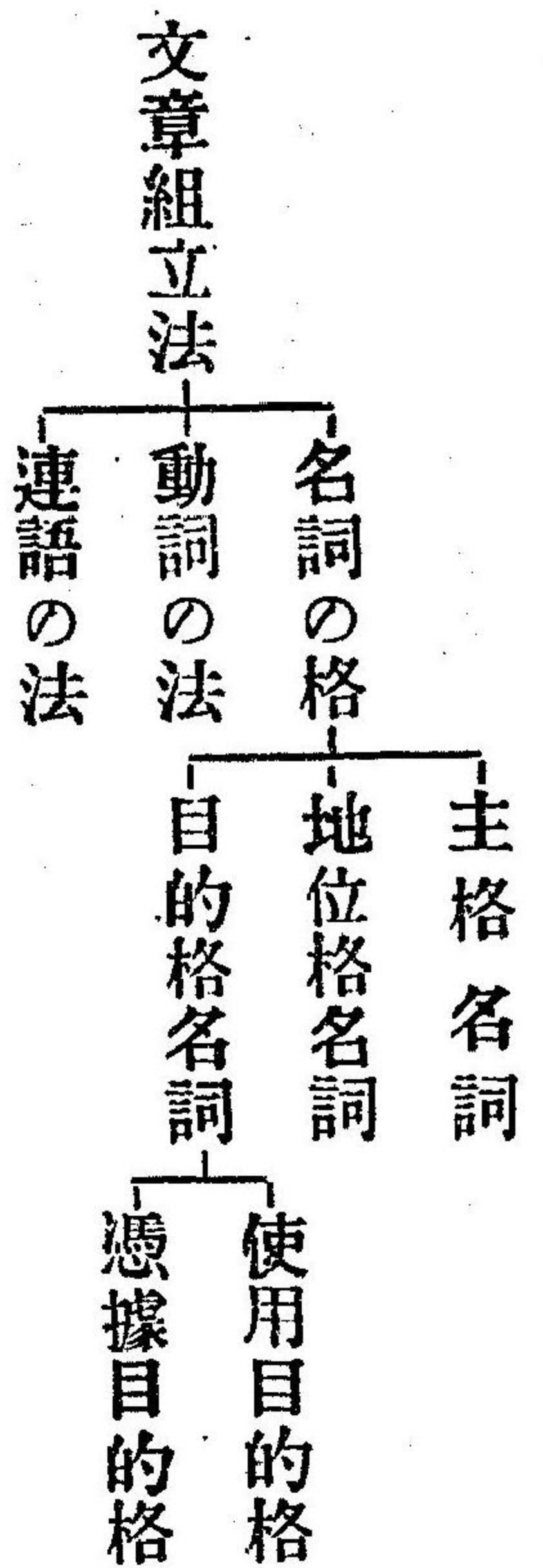
鶉は水を潜りて魚を捕る

鳥は寐床を出で、空を飛ぶ

なごやうに「を」の靈辭が語尾に添はりて憑據の意味を表

はと示す名詞の格をさす

上に講述せる目的格名詞の類別を系線表圖に表明しもつて一目瞭々その靈辭所屬の語尾を詳かにせしめ記憶の便に供ふる左のごとし



第二節 動詞の法

動詞の法とは人事日用の所作の上における種々の機轉妙用およびその規定を辨じ別かつ動詞の活用法をいふ 効用上の品種によりこれを類別して

動詞の法を斯の如く三類に大別し更にその結句法を十種に類別し以て名詞の格の三大別と又その主格名詞の八小別と起るるを照應すべく文章組

- 結句法
- 照應法
- 時機法

第一則 結句法

の三種とす

結句法とは語尾にけりせりたりなりぬつきべとめりらんけんらとけらんとんまとなんてんはやまほしたとがもがずじまじかはやはめやらめやてよよねなんななかれなな〇そかなかもはやはるの結尾靈辭が添はりて文意語脈を締結し主格名詞とあひ照應してそれが意味を別かち表はすべき活用法を辨する動詞の法をいふ 更に効用上の性質につき細別して

立法を發揮して新く學理を秩然たらしむたるは斐臣が數十年の苦學に思ひをさはめて發明せしところにして一定不變犯すべからざるの原則を公言して自ら任ずるところなり 是の法の法に背くもたらはたゞ語法文則の學理に反するのみこの法本編をもて嚆矢とす

- 決定法
- 想像法
- 推測法
- 將然法
- 不然法
- 反轉法
- 命令法
- 願望法
- 禁止法
- 感歎法

の十種とす

第一目 決定法

決定法とは語尾に「けり」せりたりなりぬつきべし」の靈辭が添はりて事の決定まりまた物を決定する意味を言ひ表はすに用ふる動詞の法をいふ たとへは

花が咲きけり

樹は紅葉せり

月も出でたり

今日は天氣なり

木の葉は散りぬ

郭公の初音を聞きつ

昔は淋しかりき

明朝は早く起くべし

などやうに「けり」せりなどの類の靈辭が語尾に添はりて決定

の意を表はし示す動詞の法をさす

第二目 想像法

想像法とは語尾に「めりらんけん」の靈辭が添はりて事を想像する意味を言ひ表はすに用ふる動詞の法をいふ たどへは

花は咲くめり

月や出づらん

雪を降りけん

なぞやうに「めり」などの靈辭が語尾に添はりて想像の意を表はし示す動詞の法をさす

第三目 推測法

推測法とは語尾に「らとけらと」の靈辭が添はりて物を推

測する意味を言ひ表はすに用ふる動詞の法をいふ たど

へは

花が散るらと

雪こそ降りけらと

なぞやうの「らと」などの靈辭が語尾に添はりて推測の意を表はし示す動詞の法をさす

第四目 將然法

將然法とは語尾に「んまとなんてん」の靈辭が添はりて事の將然なる意味を言ひ表はすに用ふる動詞の法をいふ たどへは

明日花は咲かん

暮れなほ月見に往かまと

いまに雨も止みなん
友に告げやりてん

なごやうに「ん」ごもの靈辭が語尾に添はりて將然なる意
を表はし示す動詞の法をさす

第五目 不然法

不然法とは語尾に「すじ」の靈辭が添はりて事の不然なる
意味を言ひ表はすに用ふる動詞の法をいふ たごへは
花はいまだ咲かず
月もまだ出でじ

なごやうに「す」ごもの靈辭が語尾に添はりて不然なる意
を表はし示す動詞の法をさす

第六目 反轉法

反轉法とは語尾に「やはかはめやらめや」の靈辭が添はり
て事の反轉する意味を言ひ表はすに用ふる動詞の法をい
ふ たごへは

然る事の有りやは

花は散るものかは

鶯はまた鳴かめや

よもこの事は知るらめや

なごやうに「やは」ごもの靈辭が語尾に添はりて反轉する
意を表はし示す動詞の法をさす

第七目 命令法

命令法とは語尾に「よてよやをてをねなんん」の靈辭
が添はりて他に命令する意味を言ひ表はすに用ふる動詞

の法をいふ たどへは
 はや月は出でよ
 花は咲きてよ
 鳴けや鶯
 雪よはやも降れを
 船寄せてを
 吾と共に往きぬ
 早くそこ立たなん
 疾く起きなへん

なごやうに「よ」ごもの靈辭が語尾に添はりて命令する意
 を表はし示す動詞の法をさす

第八目 希望法

希望法とは語尾に「はやまほ」と「た」と「が」の靈辭が添
 はりて物を希望する意味を言ひ表はすに用ふる動詞の法
 をいふ たどへは

花を一枝折らばや
 彼に見せまほし
 初音を聞きたし
 月見に往きしが
 涼しき風もが

なごやうに「はや」ごもの靈辭が語尾に添はりて願望する
 意を表はし示す動詞の法をさす

第九目 禁止法

禁止法とは語尾に「なかれなな〇〇そ」の靈辭が添はりて

事を禁止する意味を言ひ表はすに用ふる動詞の法をいふ

たとへば

花よ散るななかれ

恩を忘るな

道をな誤りそ

なぞやうに「なかれ」などの靈辭が添はりて禁止する意を表はし示す動詞の法をよす

第十目 感歎法

感歎法とは語尾に「かな」「かかもかや」「か」の靈辭が添はりて物を感歎する意味を言ひ表はすに用ふる動詞の法をいふ
ふ たとへば
美しくも匂ふ花かな

あの花は櫻かも

その事は實事かや

それか有らぬか

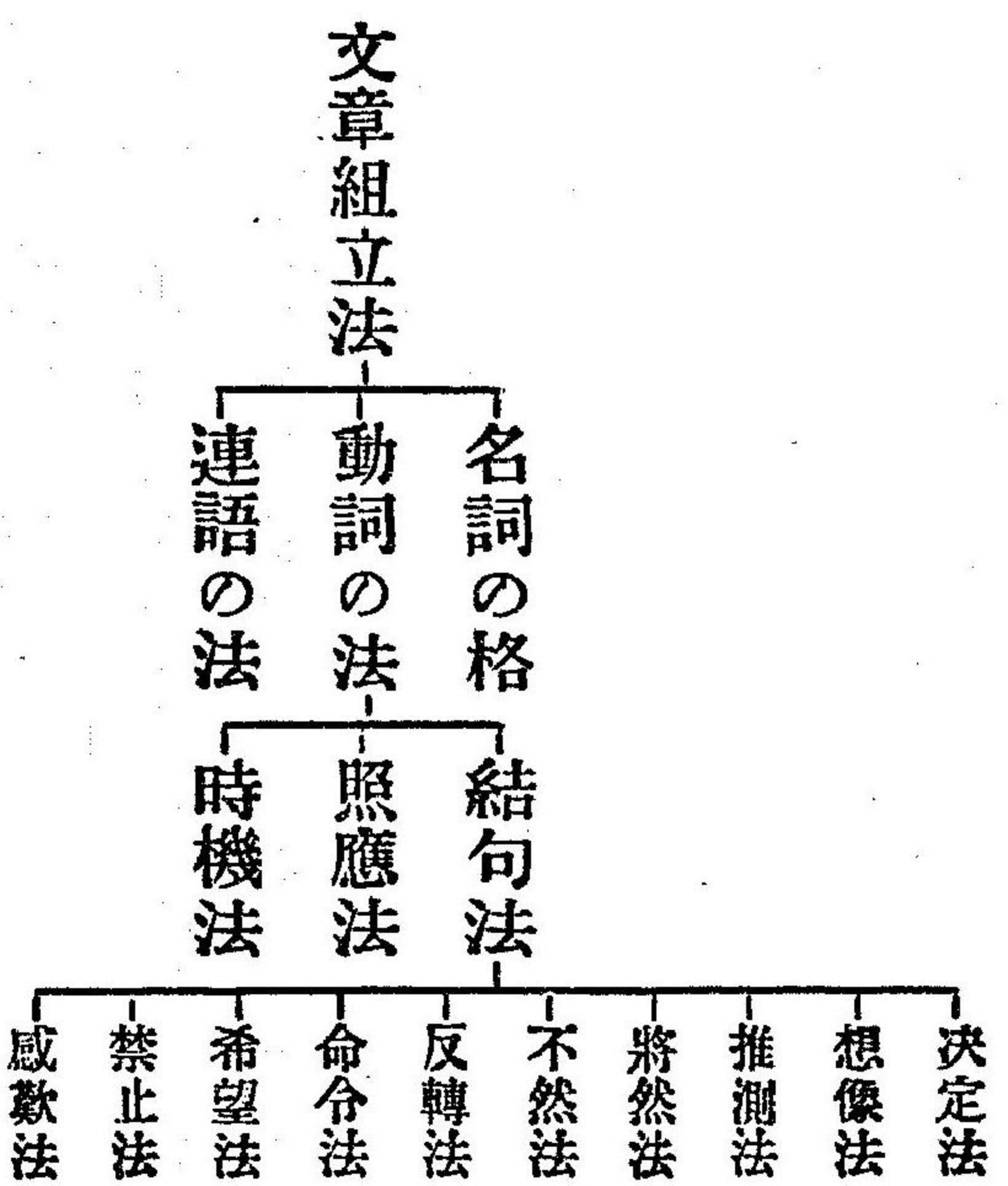
なぞやうに「かな」などの靈辭が語尾に添はりて感歎する意を表はし示す動詞の法をよす

上に講述せる結句法の類別を系線表圖に表明しもつて一目瞭々その靈辭所屬の語尾を詳かにし記憶の便に供ふる左のごとし

照應法を新の如く
 句調照應法
 句意照應法
 の二類に大別し一は句調
 をとりのふる法規を定め
 一は句意をとりのふる法

第二則 照應法

照應法とは一章句中の首位たる名詞の格における主格名
 詞とその尾位たる動詞の法における結句法とがあひ照應
 してその語尾を變化せしめ句調をとりのふる法則をいふ



規定めて文章組立法
 の原則を啓發し以て文典
 の學理を秩然たらしめたる
 は 聖臣が多年の意匠に思
 ひ得たりしていままで分て
 先哲語學家の言はざりし
 所なり また新刊の語學
 講義録 文典類に於して
 見ざるころなり 是れ本
 編題號の開發新式たる
 ゆゑよしなり 古典に徵
 照し實地作文詠歌の上に歴
 驗せし末からうじて斷定せ
 しなり 國語文法 上千古
 未發の一大發明を公言して
 國のためを誇らざるを得ざ
 るなり 實に本編講義
 録をもて嚆矢とす

効用上の性質によりこれを類別して

句調照應法

句意照應法

の二類とす

第一款 句調照應法

句調照應法とは一章句中語氣文勢の調節をとりのへんが
 ために起句と結句との照應掛け合はせの上一定の格あ
 る方法をいふ ぬゑに起結照應法とも稱す いはゆる係
 り結びの格これなり

さてその照應掛け合はせの上において句の首位たる主格

名詞をはこの照應法に就いての名を

起句格

といひ、その尾位なる各種の動詞法をはこの照應法に就
しての名を

結句格

といふ

第一項 起句格

起句格とは章句組立ての上に、おいて結句格の斷續各性
にあひ照應して句首を起こと文意の方針を指し示す主格
名詞をいふ 語氣の輕重各性に據り、これを細別して

がの起句

はも起句

そや起句

こそ起句

の四種とす

第一目 がの起句

がの起句とは「がやの」の靈辭が語尾に添はりて句首を言
ひ起こす主格名詞をいふ たとへは

花が咲く

人が来る

鶯の鳴く

秋風の吹きぬ

などやうの「花が人が鶯の秋風の」の如く語尾に「が」の靈
辭が添はる類これなり

第二目 はも起句

はも起句とは「はやも」の靈辭または「よや」の靈辭が語尾

に添はりて句首を言ひおこす主格名詞をいふ たどへは

吾は往く

人は歸りぬ

鶯は白し

鳥は黒し

鳥も黒し

鶉も黒し

君よ來たまへ

車夫や走れ

なぞやうの「吾は人は鶯は鳥は鳥も鶉も君よ車夫や」の如く語尾に「はもよ(や)」の靈辭が添はる類これなり

さて上の「が」の句起はも起句は共にその語尾の「が」はも

よ(や)の靈辭が隠れ省かりて、音にその意味のみ含まり、それが資格を有せるあり これを「起辭隠れ」と稱すいはゆる「徒の係り」これなり たどへは

花咲く

人來る

鶯鳴く

秋風吹きぬ

吾往く

人歸りぬ

君來たまへ

車夫走れ

なぞやうの「花人鶯秋風吾人君車夫」の如く「花が人が鶯の

秋風の吾は人も君よ車夫や」と言ふべきをその語尾の「が」のはもよやの靈辭が隠れ省かりてその意味のみ存せる類これなり また起辭ごめに主格名詞が隠れ省かりて音にその意味のみ含まりそれが資格を句間に存せるありこれを「主格隠れ」と稱す たごへは

花園は雪の如く風に散る(櫻が)
 今日(吾は)も花を見て暮らせり
 郭公(君よ)が鳴く聞きたまへ

なごやうの「櫻が」(吾は)「君よ」の如き主格名詞が散る花を聞きたまへの語首に隠れ省かりて意味のみ存せる類これなり

第三目 ぞや起句

ぞや起句とは「ぞやや」の靈辭また「かなん」(なも)の靈辭が語尾に添はりて句首を言ひおこす主格名詞をいふ たごへは

風ぞ寒けき
 雨ぞ降りける
 あれなん富士の山なる
 神なも尊かる
 月や出づらん
 雪や積れる
 何所か宿りなる
 誰か居る

なごやうの「風ぞ雨ぞあれなん神なも月や雪や何所か誰

「か」の如く語尾に「ぞなん(なも)やか」の靈辭が添はる類
れなり

第四目 こそ起句

「こそ起句」とは「こそ」の靈辭が語尾に添はりて句首を言ひ
おこす主格名詞をいふ たとへは

吾こそ見れ

人こそ知れ

紅葉こそ散れ

秋こそ淋しけれ

なぞやうの「吾こそ人こそ紅葉こそ秋こそ」の如く語尾に
「こそ」の靈辭が添はる類これなり

さてまた上の「ぞや起句こそ起句」は共にその起句のみ置

きて結句が隠れ省かりてその意味のみ起句の語尾に含ま
りその結句の資格を兼有するあり これを「結句隠れ」と
稱す たとへは

然有りきとぞ(言へる)

斯く言ひ傳へたりとぞ(聞きける)

勉強せとゆゑにや(有りけん) 及第せり

昔いつの時代にか(有りけん) 歌仙ありけり

いかなる志を懐きてか(在らん) 交際をも絶ちて勤學す

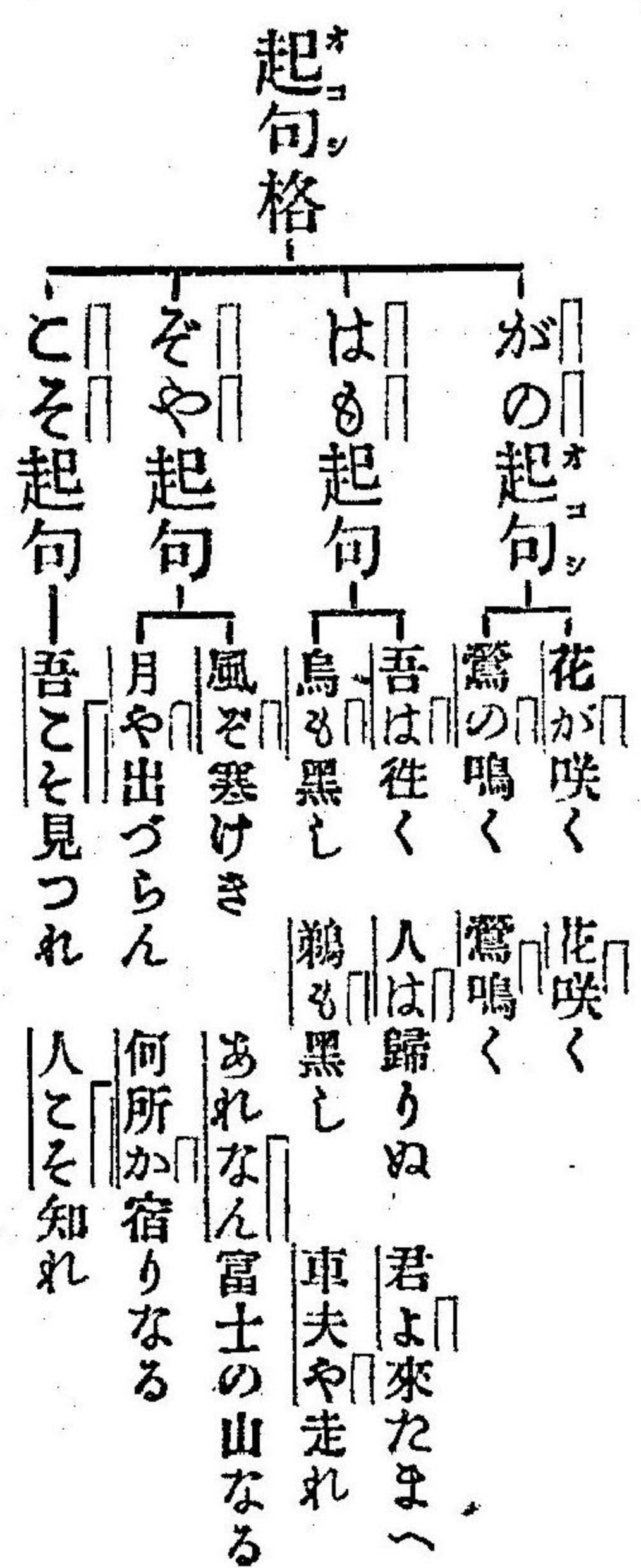
一同に代りて斯くなん(申しきこゆる)

是彼れ思ふどころ有りてなん(實は申し盡さず)

いさゝか思ふ旨を述ぶるにこそ(有りけれ)

たゞ道のため一筋にこそ他(願ひつれ)に望み有るには候はず
 などやうにぞやかなんこその起辭の語尾に「聞きける有
 りけん在るらん申ときこゆる申と盡さゞりと有りけれ願
 ひつれ」の結句が隠れ省かりてその意味のみ存せる類こ
 れなり

上に講述せる起句格の類別を系線に表明しもつて一目瞭
 らその照應法の首位を辨知せしめ記憶の便に供ふる左の
 ごとし



第二項 結句格

結句格とは章句組立ての上に於て起句格の輕重各性に、
 あひ照應して、その句尾を結びもつて句調をととのふる
 結句段落の規定をいふ 種類を大別して

- 所作結句
- 疑問結句
- 物名結句
- 接續結句

の四種とす

第一目 所作結句

所作結句とは作用存在形状の各動詞にて句尾をどしめ結
 ぶ一定の格をいふ 語脈の斷續各性に據り、これを細別し

て

ときけれ結句

(となしも)(べしきべけれ)

きとしか結句

(きなきや)(にきにしか)(てき

てしてしか)

すぬね結句

(すぬぬよ)

りるれ結句

(けりけるけれ)(せりせるせれ)(たり

たるたれ)(なりなるなれ)(めりめる

めれ)(けりけるけれ)(せりせるせれ)

(てりてるてれ)(へりへるへれ)(めり

めるめれ)(れりれるれれ)

ううるうれ結句

(うもうるよ)

くくるくれ結句

(くもくるよ)

すするすれ結句

(すもするよ)

つつるつれ結句

(つもつるよ)

ぬぬるぬれ結句

(ぬもぬるよ)

ふふるふれ結句

(ふもふるよ)

むむるむれ結句

(むもむるよ)

ゆゆるゆれ結句

(ゆもゆるよ)

るるるるれ結句

(るもるるよ)

ぎぎるぎれ結句

(ぎもぎるよ)

くくけ結句

(くもくよ)

すすせ結句

(すもすよ)

つつて結句

(つもつよ)

ふふへ結句

(ふもふよ)

第二 疑問結句起結照應法圖式

疑問指示	なぞ	がの起句 はも起句	がの起句
	なぞ	ぞや起句	ぞや起句
	○	こそ起句	こそ起句

人が鶯の花は月も君よ車夫や雪ぞ
 是なん神なも風や何人が吾こそ
 悲しきはなぞ悲しきやなぞこれはいかにこれやいか
 あれば誰ぞあれや誰ぞそれは幾つそれや幾つ

第三 物各結句起結照應法圖式

主格名詞	がの起句	がの起句
	はも起句 ぞや起句	こそ起句
	物	物

人が鶯の花は月も君よ車夫や雪ぞ
 是なん神なも風や何人が吾こそ
 花は櫻人は博士人は萬物の類是も吾が物
 是ぞ一大事彼なん富士の峯それこそ大段

第四 接續結句起結照應法圖式

主格名詞	がの起句	がの起句
	はも起句 ぞや起句	こそ起句
	材	料

人が鶯の花は月も君よ車夫や雪ぞ
 是なん神なも風や何人が吾こそ
 花は散りつゝ思ひつゝ知りつゝ見つゝ
 聞きつゝ歎きつゝ悲しむつゝ悔いつゝ
 聞き知りながら見ながら辨へながら思ひながら
 學びながら花見がてら眺めがてら遊びがてら
 思ふものから言ふものから爲るものから
 望むものから受くるものから響むものながら
 散りぬるがゆゑ散りぬるがゆゑ散りぬるがゆゑ
 雨の降るものゆゑ雨の降るものゆゑ雨の降るものゆゑ
 我が君がため我が君がため我が君がため
 歸り来るがに歸り来るがに歸り来るがに

前章各條に文章組立法における起結照應法に就きての諸法則の概畧をあるは用法上の説き明かにあるは圖式に比準と悉く講述せり。なほその用例を一々示して詳かにせん。たとへば

所作結句起起結應法

「ときけれ結句」の例

風が寒む

風が寒き

風ぞ寒き

風こそ寒けれ

花は美む

花や美むき

花こそ美むけれ

「きむか結句」の例

人の問ひき

人が問ひむ

人や問ひむ

人こそ問ひけれ

月も出でにき 月ぞ出でにし 月こそ出でにけれ

「すぬね結句」の例

友が来す 友が来ぬ 友ぞ来ぬ

友こそ来ぬ

鶯は鳴かず 鶯なん鳴かぬ 鶯こそ鳴かぬ

「りるれ結句」の例

品の有り 品の有る 品や有る

品こそ有れ

物も有り 物か有る 物こそ有れ

雪は降り 雪ぞ降れる 雪こそ降り

人も論ぜり 人や論ぜる 人こそ論ぜれ

雨は止みけり 雨ぞ止みける 雨こそ止みけれ

空も晴れたり 空なん晴れたる 空こそ晴れたれ

聲は聞こゆなり 聲を聞こゆなる 聲こそ聞こゆなれ

姿も見ゆめり 姿や見ゆめる 姿こそ見ゆめれ

「ううるうれ結句」の例

吾が得 吾が得る 吾ぞ得る

吾こそ得れ

人も得 人や得る 人こそ得れ

「くくるくれ結句」の例

彼が起く 彼が起くる 彼や起くる

彼こそ起くれ

家も焼く 家を焼くる 家こそ焼くれ

「すするすれ結句」の例

身が瘦す

身が瘦する

身や瘦する

身こそ瘦すれ

浪は寄す

浪を寄する

浪こそ寄すれ

「つつるつれ結句」の例

栗が落つ

栗が落つる

栗や落つる

栗こそ落つれ

鶏も鳴きつ

鶏を鳴きつる

鶏こそ鳴きつれ

「ぬぬるぬれ結句」の例

彼の死ぬ

彼の死ぬる

彼なん死ぬる

彼こそ死ぬれ

花は散りぬ

花を散りぬる

花こそ散りぬれ

「ふふるふれ結句」の例

人が誣ふ

人が誣ふる

人や誣ふる

人こそ誣ふれ

吾も捕らふ

吾を捕らふる

吾こそ捕らふれ

「むむるむれ結句」の例

彼が恨む

彼が恨むる

彼や恨むる

彼こそ恨むれ

人は譽む

人なん譽むる

人こそ譽むれ

「ゆゆるゆれ結句」の例

齡が老ゆ

齡が老ゆる

齡ぞ老ゆる

齡こそ老ゆれ

縁は絶ゆ

縁や絶ゆる

縁こそ絶ゆれ

「るるるれ結句」の例

日が暮る

日が暮る、

日や暮る、

日こそ暮るれ

木を枯る、

木こそ枯るれ

木も枯る

人が植うる

人や植うる

「うてるうれ結句」の例

人が植う

吾は飢うる

吾こそ飢うれ

人こそ植うれ

人が往く

人や往く

吾は飢う

鳥を鳴く

鳥こそ鳴け

「くくけ結句」の例

人が往く

鳥を鳴く

鳥こそ鳴け

人こそ往け

「すすせ結句」の例

鳥も鳴く

鳥を鳴く

鳥こそ鳴け

竹が臥す

竹が臥す

竹を臥す

竹こそ臥せ

彼は正す

彼や正す

彼こそ正せ

「つつて結句」の例

春が立つ

春が立つ

春や立つ

春こそ立て

友は待つ

友を待つ

友こそ待て

「ふふへ結句」の例

鳥が飛ぶ

鳥が飛ぶ

鳥を飛ぶ

鳥こそ飛べ

吾も逢ふ

吾なん逢ふ

吾こそ逢へ

「むむめ結句」の例

童が讀む

童が讀む

童を讀む

童こそ讀め

雨は止む

雨や止む

雨こそ止め

るるれ結句の例

雪が降る

雪が降る

雪や降る

雪こそ降れ

水も氷る

水を氷る

水こそ氷れ

らんらんらめ結句の例

風の吹くらん

風の吹くらん

風や吹くらん

風こそ吹くらめ

月は出づらん

月を出づらん

月こそ出づらめ

吾も往かん

吾を往かん

吾こそ往かめ

霜は置きけん

霜や置きけん

霜こそ置きけめ

吾も聞きてん

吾を聞きてん

吾こそ聞きてめ

人は知りなん

人や知りなん

人こそ知りなめ

吾も見まじ

吾を見まじ

吾こそ見まじか

ららららら結句の例

夜が更くらら

夜が更くらら

夜や更くらら

夜こそ更くらら

雪は積もるらら

雪を積もるらら

雪こそ積もるらら

雨も降りけらら

雨や降りけらら

雨こそ降りけらら

を結句の例 (これは語尾に「ら」や「め」の辭を或は添へ或は合めて言ふ例を知るべし)

あれが筑波山ぞ

これは吾が物を

それも君の品では無きぞよ。

【これを結句】の例 (これは語尾に「有る」と言ふ結びの詞を含めて言ふ例と知るべし)

それが眞事の道理にぞ (有る)

自身は知らぬ事にぞ (有る)

これもその意味にぞ (有る)

【ぞを結句】の例 (これは語尾に「言へる」と言ふ結びの詞を含めて言ふ例と知るべし)

これが實の事とぞ (言へる)

それは事實に叶はずとぞ (言へる)

昔もその通り言ひきとぞ (言へる)

【ぞか結句】の例 (これは語尾に「言ひけん」と謂ふ結びの詞を含めて言ふ例と知るべし且つ「や」の辭を添へても言ふ)

古老が斯く言ひ傳へたりと (言ひけん)

人はもと猿より進化せしものと (言ひけん)

古昔も然有りきと (言ひけん)

【にや結句】の例 (これは語尾に「有らん」と謂ふ結びの詞を含めて言ふ例と知るべし)

それが眞實の事に (有らん)

これはいかなる理由に (有らん)

人もこの譯は知らざるに (有らん)

【とよ結句】の例

人が詫ふとよ

彼も知らずとよ

それはまことに説とよ

「はや結句」の例

彼の成りの果はや

花は散りとはや

あれもつひに死にけるはも

「かな結句」の例

花が咲きけるかな

月も出でにけるかな

今日は殊に長閑けくも有るか

「かも結句」の例

それが事實かも

あれはいつそや逢ひと人かも

それも誠の話か

「かは結句」の例

人が知るものは

斯かる事はまたと有るべきかは

彼も容易に爲べしやは

「らめや結句」の例

人が聞くらめや

彼は素より知るらめや

あれもよくは思はめや

「はや結句」の例

吾が引き受けはや

おのれも爲て見せばや

自身も爲まほし

みづからも逢ひたし

「し」が結句の例

自身が學びてしが

みづからもよく聞きにしが

吾もいかで見しが

人は知るよしもが

彼も變はり無くもがな

「な」結句の例

花よ疾く咲きな

汝よもはや寝な

鶯も鳴かな

雪は降らん

「てよ」結句の例

汝よ往きてよ

是よ早く起きよ

雪よとく消えぬ

童は使に往け

女も臥せ

霞ははや立て

鳥も飛べ

汝よこそ讀め

雪は降れ

汝も試験を受け

「なかれ」結句の例

汝よ爲るなかれ
少女よ忘るなかれ
童よいたづら爲な
紅葉な散りそ

「まじ結句」の例

時がまだ來まじ
吾は往くまじ
彼もいまだ歸るまじ
人は歸らじ

疑問結句起結照應法

「なぞなぞ結句」の例 (こは語尾に「然有るらん」また「ならん」と言ふ結びの詞を含めて言ふ例と知るべし)
悲しきはなぞ
然有るらん

これはいかに
然有るらん
それも幾つ
ならん

そこに在るや誰
ならん
それや幾つ
ならん

物名結句起結照應法

「物物結句」の例 (こは語尾に「なりなるなれ」と言ふ結びの詞を含めて言ふ例と知るべし)
あれが筑波山
なり
あれが筑波山
なる
あれや筑波山
なり
花は何よりも櫻
なり
花こそ何よりも櫻
なれ
是も一大事
なり
是こそ一大事
なれ
あれが筑波山
なる
あれこそ筑波山
なれ
花ぞ何よりも櫻
なる
是ぞ一大事
なる

接續結句起結照應法

「つゝ結句」の例(こは語尾に「在り」と言ふ結びの詞を含めて言ふ例と知るべし)

花が散りつゝ(在り)

雨の降りつゝ(在り)

月は照りつゝ(在り)

鹿も鳴きつゝ(在り)

「ながら結句」の例(こは語尾に「且つ然り」と言ふ結びの詞を含めて言ふ例と知るべし)

人が知りながら(かつ然り)

吾は聞きながら(かつ然り)

この事も有りながら(かつ然り)

「ものから結句」の例(こは語尾に「併し矢張り」と言ふ結びの詞を含めて言ふ例と知るべし)

事が運ぶものから(まかしやはり)

人はみな然は言ふものから(まかしやはり)

吾も然思ふものから(まかしやはり)

然は望むものながら(まかしやはり)

「がゆゑ結句」の例(こは語尾に「斯かり」と言ふ結びの詞を含めて言ふ例と知るべし)

事が斯く行き違ふがゆゑ(斯かり)

風の吹きぬるゆゑ(斯かり)

そは世の風潮に適せぬがゆゑ(斯かり)

これも時におくるものゆゑ(斯かり)

「がため結句」の例（こは語尾に「然るなり」と言ふ結びの詞を含めて言ふ例と知るべし）

物の行き渡らざるがため （然るなり）

彼が歸り来るがに （然るなり）

その理由は斯く々がため （然るなり）

彼が歸りのあそぎる川の水がまさるがに （然るなり）

などやうに起句と結句との照應をこゝのへて語氣句調を流暢ならむなる一定の格例のこときこれなり

さて、なほこの起結照應法に重複格あり、そは一章句中起結格の配置が幾つも重なる格例にて、これを「起辭重なり」と稱す。たとへば、その重なり方は「はる起句」と「そや起句」とが重なるときは「はる起句」が主に成り、「そや起句」が

賓と成り、また「はる起句」と「こそ起句」とが重なるときは、やはり「こそ起句」が主に成り、「はる起句」が賓と成る定例なり。そは、つまり語氣の重きに文意が歸するを以てなり。ゆゑに「そや起句」または「こそ起句」のうち何れにても重なるときは結句もまたそれに、あひ對して重なり、たとへば起句二つ重なれば結句も二つ重なり三つなるときは三つとやうに比準して語尾を結ぶを一定の法とす。また「はる起句」と「がの起句」とが重なるときはその一句中の配置の模様によつて文意の重く歸する方に係かりて語尾を結ぶものと知るべし。たとへば

「はる起句」と「そや起句」とが重なる例

花咲く頃ぞ心は長閑けき

「がたぬ結句」の例（「は」語尾に「然るなり」と言ふ結句の詞を含めて言ふ例を知るべし）

物の行き渡らざるがため （然るなり）

彼が歸り来るが故 （然るなり）

その理由は斯く故に （然るなり）

彼が歸りの然るき川の水がまさるが故 （然るなり）

なごとの起句と結句との照應をさすのへは語氣句調を流暢なるをある一定の格例のことごとれなり

さて、なほこの起結照應法は重複格あり、是は一章句中起

結格の配置が幾つもある格例なり、これを「起辭重なり」と稱す、なごとの重なりは「は起句」と「そや起句」が重なるときは「は起句」が主に成り、

「そや起句」が主に成り、

賓と成り、また「はも起句」と「こそ起句」が重なるときは、やはり「こそ起句」が主に成り、「はも起句」が賓と成る定例なり、そは、つまり語氣の重きに文意が歸するを以てなり、ゆるに「そや起句」または「こそ起句」のうち何れにても重なるときは結句もまたそれに、あひ對して重なり、たとへば起句二つ重なれば結句も二つ重なり三つなるときは三つとやうに比準して語尾を結ぶを一定の法とす、また「はも起句」と「が」の起句とが重なるときはその一句中の配置の模様によつて文意の重く歸する方に係かりて語尾を結ぶものと知るべし、たとへば

「はも起句」と「そや起句」が重なる例

花咲く頃ぞ心は長閑けき

今宵も月や霞むめる

「はも起句」と「こそ起句」どが重なる例

吾こそ郭公の初音は聞きつれ

彼も聲こそ聞け姿は見まじ

「ぞや起句」と「こそ起句」どの中にて重なる例

吾こそ鶯の音を聞きつれ彼は聞かずや在らん

「はも起句」と「がの起句」どの中にて重なる例

吾は花の散るを惜とむ

人が吾をも誘ひて花見に連れゆけり

などやうに起結を照應して句調をととのふるが如し

たゞこの中に「をにて」の辭のごときは主格名詞に添はら

ざる例なるを以て起句にてはあらざる學理はすでに上の

各條において詳かに説明かゝるが如し

さてまた起結照應法は文典上至切重要な法規にして文意

の由るところを詳かにし、語氣句調をととのふるに主眼

たる部目たり

然るに本居宣長翁が「詞の玉緒に「はも徒」「そのや何

「こそ」とやうに三條に分類して断定せられし舊式（從來

ノ語學家ナベテ此ノ説ニ從ヒ新刊ノ文典類語學講義録類ミナ然リ）を廢し新たに「がの起句」の

一條を立て、學理を一新啓發せるなれば受け引くまじ

き輩もやと思はるゝがゆゑ今悉く古典に徵照して初學

の惑ひを解かんとす

ゆゑに古歌をもをかつく引證をもつて起結照應の法理

を會得徹底せしむるために上に掲げ示せる表圖に比準し

順次目を逐ひて一目その學理定例を辨ふる左のごとし

起結照應法の證歌

「ときけれ結句」の例

獨り(古今集十三)として物を思へは秋の田の

稻葉のそよと言ふ人の無き

吹く風(務撰集三)の誘ふ物とは知りながら

散りぬる花の強ひて戀とき

春(古今集一)の夜の暗はあや無と梅の花

色こそ見えね香やは隠るゝ

秋風(後撰集六)の晴るゝは嬉と女郎花

立ち寄る人や有らんと思へは

年も良(拾遺集十)と養コガヒ登も得たり大國の

の

は

も

ぞ

や

里頼もとく思ほゆるかな

吾(拾遺集十七)が兄コト子を戀ふるも苦コと暇有らば

拾ひに往かん戀ひ忘れ貝

残り(古今集二)無く散るぞ愛でたき櫻花

在りて世の中果ての憂けれは

山(古今集九)隠す春の霞を恨めとき

何れ都の境なるらん

思(千載集二)ふ事千重にや繁ハき喚コ子鳥

信太の杜の方に鳴くなり

花(古今集二)の散る事や詫ハびとき春霞

立田の山の鶯の聲

石見(拾遺集十九)瀧何かはつらきつらからは

か	こそ	れ隠辭起
<p>恨みがてらに來ても見よか <small>(後撰集九)</small> 淺芽生の小野の篠原忍ぶれど 餘りてなごか人の戀とき <small>(古今集十五)</small> 心こそうたて憎けれ染めさらは 移ろふ事も惜とからまじや <small>(古今集四)</small> 月見れは千々に物こそ悲とけれ 吾が身一つの秋には有らねど <small>(古今集九)</small> 都出で、今日三日の原泉川 河風寒と衣鹿背山 <small>(風葉集八)</small> 衣手にみ澁着くまで植ゑと田を 引板吾延へ守れる苦と <small>(後撰集十七)</small> 岩の上に旅寝をすれはいと寒と</p>		

は	も	れ隠格主
<p>見ぬ人の形見がてらは折らざりき <small>(後撰集三)</small> 身に準ふる花に有らねは <small>(後撰集三)</small> 君來ずて年は暮れにき立ち返り 春さへ今日に成りにけるかな <small>(拾遺集十四)</small> 手枕の透間の風も寒かりき 身は習慣はとの物にぞ有りける <small>(古今集十四)</small> 斯く戀ひん物とは吾も思ひにき 心の占ぞ正とかりける</p>	<p>きとと結句の例</p>	<p>苔の衣を吾に貸さなん <small>(古今集十一)</small> 人知れず思へは苦と紅の 末摘花の色に出でなん</p>

ぞ	や	か
<p>(後撰集十) 鳴門よりさし出だされし船よりも 吾ぞ寄るべも無き心地せし</p> <p>(古今集十二) 芳野川岩波高く往く水の 早くぞ人を思ひ初めてし</p> <p>(後撰集七) 問ふ事の秋も稀に聞ゆるは 假りにや吾を人の頼めし</p> <p>(古今集十) 郭公峯の雲にや交りにし 有りとは聞けを見る由も無き</p> <p>(古今集四) 何人か来て脱ぎ掛けし藤袴 来る秋ごとに野邊を匂はす</p> <p>(和歌所歌合) 神代より幾代か經にし未通女子が 袖振る山の瑞垣の松</p>		

こそ	の	は
<p>(古今集四) 昨日こそ早苗採りしか何時の間に 稻葉そよぎて秋風の吹く</p> <p>(拾遺集十一) 戀ひすてふ吾が名はまだき立ちにけり 人知れずこそ思ひ初めし</p>	<p>「すぬね結句」の例</p> <p>(古今集六) み芳野の山の白雪踏み分けて 入りにし人の音信もせぬ</p> <p>(後撰集十三) 現には臥せを寝られず起き返り 昨日の夢を何時か忘れん</p> <p>(古今集十三) 夢路には脚も休めず通へとも 現に一目見し事は有らず</p> <p>(古今集五) ちはやふる神代も聞かず立田川</p>	

も	ぞ	や	か
---	---	---	---

唐紅に水くゝるとは
慕はれて來にも心の身に有れば

歸るさまには道も知られず
長しとも思ひぞ果てぬ昔より

逢ふ人からの秋の夜なれば
櫻花とく散りぬとも思ほえず

人の心を風も吹きあへぬ
月や有らぬ春や昔の春ならぬ

吾が身一つは本の身にとて
流れゆく水氷りぬる冬さへや

なほうき草の跡は止めぬ
逢ふ夜とは誰かは知らぬ棚機の

こそ	れ隠辭起	れ隠格主
----	------	------

明くる空をも包まさらなん
春の夜の暗はあや無と梅の花

色こそ見えぬ香やは隠るゝ
思へとも人目づゝみの高けれは

川と見ながらえこそ渡らぬ
春日野の若紫の摺り衣

ゑのふの亂れ限り知られず
あし引の山郭公のみならず

大方鳥の聲も聞えず
難波渦恨むべき間も思ほえず

何所をみつの濱どかは成る
吾が來つる方も知られず暗部山

りるれ結句の例	の	は	も	を	や
---------	---	---	---	---	---

木々の木の葉の散りと紛ふに

梅の花見にこそ来つれ鶯の

ひとくくを厭ひとも居る

人に逢はん月の無きには思ひおきて

胸走り火に心焼け居り

一節に恨みな果てそ笛竹の

聲の内にも思ふ心有り

枕より後より戀の責め來れば

爲ん方無みを床中に居る

元輔が後と言はるゝ君ともや

今宵の歌にはづれては居る

か	こそ	主格隠れ	の	は
---	----	------	---	---

君をのみ思ひこと路の白山は

何時かは雪の消ゆる時有る

など吾が身下は紅葉と成りにけん

同じ歎きの枝にこそ有れ

音にのみ聞けは詮無と郭公

事談らはんと思ふ心有り

けりけるけれ

香を留めて問ふ人有るを菖蒲草

あやしく駒のすさめざりける

年の内に春は來にけり一年を

去年とや言はん今年とや言はん

故郷と成りにと奈良の都にも

も	そ	や	
<p>色は變らず花は咲きけり <small>(古今集十三)</small> 秋の夜も名のみなりけり蓬ふと言へは ことごとく無く明けぬるものを <small>(古今集一)</small> 浮花なりと名にこそ立てれ櫻花 年に稀なる人も待ちけり <small>(古今集六)</small> 山里は冬を淋しさ勝りける 人目も草も枯れぬと思へは <small>(古今集六)</small> 冬籠り思ひ掛けぬを木の間より 花と見るまで雪を降りける <small>(後拾遺十七)</small> 眞事にや同じ道には入りける 獨りは西へ往かじと思ふに <small>(後撰集六)</small> 今ははや打解けぬべき白露の</p>			

起辭隱れ	こそ	か	
<p>心置くまで世をや經にける <small>(新撰古今集十七)</small> 言の葉を頼むべしやは秋來れは 何れか色の變らざりける <small>(古今集五)</small> 秋を措きて時こそ有りけれ菊の花 移ろふからに色のまされは <small>(古今集六)</small> 雪降りて年の暮れぬる時にこそ 遂に紅葉ちぬ松も見えけれ <small>(古今集一)</small> 須摩の蚤の汐焼く煙風を痛み 思はぬ方に棚引きにけり いその上舊き都を來て見れば 昔翳と花咲きにけり <small>(源氏物語)</small> 妹背山深き道をは尋ねずて</p>			

れ隠格主			
は	も	や	
<p>緒絶えの橋に踏<small>(音)</small>み感ひける</p> <p>始めより逢ふは別れと聞きながら</p> <p>曉知らで人<small>(音)</small>を戀ひける</p> <p>〔せりせるせれ〕</p> <p>初雪<small>(新古今集六)</small>の布留の神杉埋もれて</p> <p>標<small>フ</small>細結ふ野邊は冬籠りせり</p> <p>秋深<small>(治承二右大臣家歌合)</small>み青葉の山も紅葉せり</p> <p>名をは時雨も染めじと思ふに</p> <p>神籬<small>(夫木集)</small>は神の心に受けてけり</p> <p>比良の高根も木綿<small>カサ</small>髪せり</p> <p>〔源氏物語松風〕</p> <p>いよら井は早くの事も忘れじを</p> <p>舊の主人や面變りせる</p>			

れ隠格主				れ隠辭起			
の	は	も		の	は	も	
<p>日暮らとの山路小暗み小夜更けて</p> <p>木の末ごとに紅葉照らせる</p> <p>此の殿は宜も富みけり福草<small>(古今集序)</small>の</p> <p>三つ葉四つ葉<small>(主人)</small>に殿造りせり</p> <p>〔たりたるたれ〕</p> <p>鳴る神の聲収めたり電の</p> <p>光りばかりそ夕立の空</p> <p>夜<small>(千鶴集十八)</small>の程にかりそめ人や來たりけん</p> <p>淀のみ菰<small>(金葉集五)</small>の今朝亂れたる</p> <p>苗代<small>(拾遺集十)</small>の水は稻井に任かせたり</p> <p>民安げなる君が御代かな</p> <p>年<small>(拾遺集十)</small>も良と養蠶も得たり大國の</p>				<p>〔たりたるたれ〕</p> <p>鳴る神の聲収めたり電の</p> <p>光りばかりそ夕立の空</p> <p>夜<small>(千鶴集十八)</small>の程にかりそめ人や來たりけん</p> <p>淀のみ菰<small>(金葉集五)</small>の今朝亂れたる</p> <p>苗代<small>(拾遺集十)</small>の水は稻井に任かせたり</p> <p>民安げなる君が御代かな</p> <p>年<small>(拾遺集十)</small>も良と養蠶も得たり大國の</p>			

そ	や	か	こそ	起
---	---	---	----	---

里頼もしく思ほゆるかな
衣手(朝集)を今朝は濡れたる思ひ寝の

夢路にさへや雨は降るらん
寄る波の心も知らで和歌の浦に

玉藻なびかんほを浮きたる
鶯(源氏物語若衆)の昔を戀ひて囀るは

木傳ふ花の色やあせたる
咲く花は千種ながらに浮華なれと

誰かは春を恨み果てたる
行く先(源氏物語玉葉)も見えぬ波路に船出して

風(古今集)に任かする身こそ浮きたれ
古郷(古今集)は春めきにけりみ芳野の

隠れ

なりなるなれ

御垣が原を霞籠めたり

世の人の忌みけるものを吾がために

無とと言はぬは誰が憂きなり

宮城野(千載集四)の萩や男鹿の妻ならん

花咲きとより聲の色なる

玉章(千載集六)に涙の掛かる心地して

時雨る、空に雁の鳴くなり

皆人(古今集十)は花の衣に成りぬなり

苔の袂よ乾きだにせよ

吾が庵(古今集十八)は都の辰已然を住む

世を宇治山と人は言ふなり

は	の	が	隠れ
---	---	---	----

か	や	ぞ	も
---	---	---	---

難波なる長柄の橋も盡くるなり

今は吾が身を何に譬へん

神無月時雨とぬらと葛の葉の

うらこがる音に鹿も鳴くなり

秋風に初雁が音を聞ゆなる

誰が玉章を掛けて来つらん

音羽山今朝超え来れは郭公

梢遙かに今ぞ鳴くなる

強顔さは浮き世の常に成り往くを

忘れぬ人や人に異なる

世の中は何か常なる飛鳥川

昨日の淵を今日は瀬に成る

こそ

記念こそ今は浮花なれこれ無くは

忘るゝ時も有らまはものを

哀てふ事に験は無けれども

言はではえこそ有らぬ物なれ

み芳野の山の白雪積もるらと

故郷寒く成り勝るなり

秋の野に人まつ虫の聲爲なり

吾かど往きていさ訪はん

めりめるめれ

沖つ洲に汐や満つらん求食りする

蘆間の鶴の立ち騒くめる

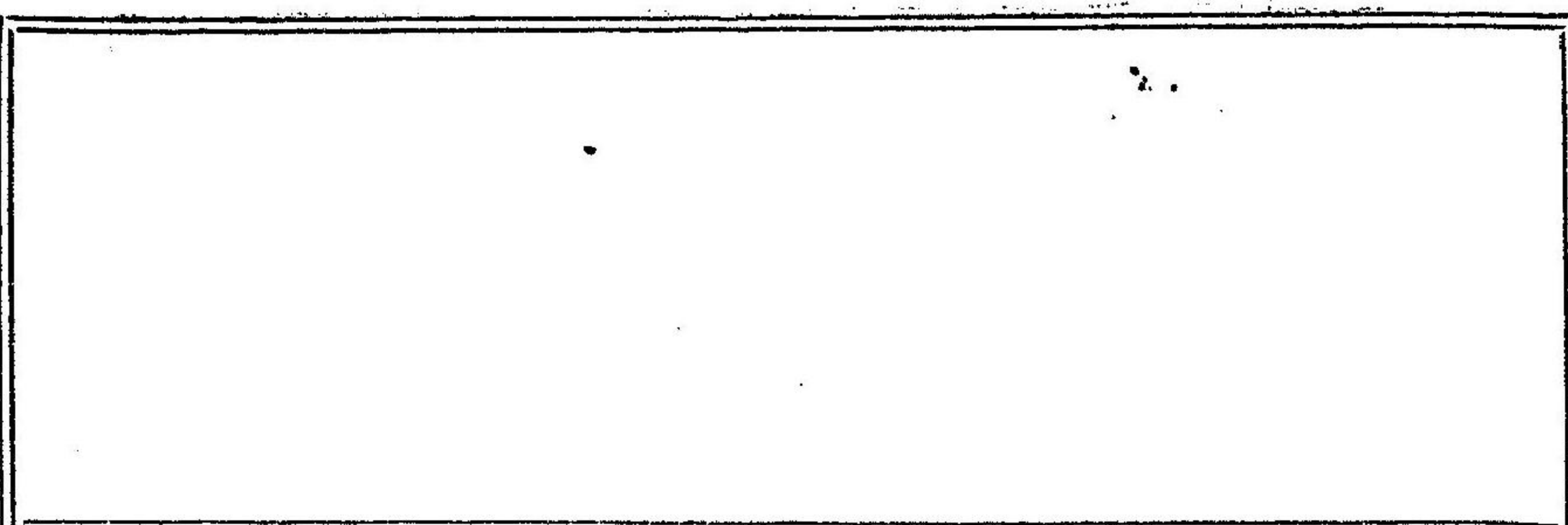
海とのみ圓居の中は成りぬめり

は	そ	も	こそ
<small>(後撰集十八)</small> 伊勢渡る川と袖より流るれば <small>(後拾遺集三)</small> 五月雨に日も暮れぬめり道遠み <small>(後撰集十八)</small> 山田の早苗採りも果てぬに <small>(後撰集十八)</small> 飛鳥川淵瀬に變はる心とは <small>(大和物語)</small> 花薄君が方にぞ靡くめる <small>(古今集十八)</small> 知りにけん聞きても厭へ世の中は <small>(夫木集)</small> わさどこそ繰り放つめれ曲り木に 浪の騒ぎに風を頻くめる	<small>(古今集五)</small> 立田川紅葉亂れて流るめり <small>(夫木集)</small> わさどこそ繰り放つめれ曲り木に 渡らは錦中や絶えなん 這ひ纏はる、青葛をは	<small>(好忠集)</small> 玉垣のみつの湊の春なれば 行きかふ人の花を手向くる	<small>(證歌未だ見あたらず)</small> ううるうれ結句の例 くくるくれ結句の例

れ隠格主	れ隠辭起	の
<small>(後撰集二)</small> 梅の花香にだに匂へ春立ちて 降る沫雪に色紛ふめり <small>(古今集五)</small> 立田川紅葉亂れて流るめり <small>(夫木集)</small> わさどこそ繰り放つめれ曲り木に 渡らは錦中や絶えなん 這ひ纏はる、青葛をは	<small>(好忠集)</small> 玉垣のみつの湊の春なれば 行きかふ人の花を手向くる	<small>(證歌未だ見あたらず)</small> ううるうれ結句の例 くくるくれ結句の例

れ隠格主	や	そ
------	---	---

(古今集四) 女郎花憂と見つゝを往き過ぐる
(古今集五) 男山に立てりと思へは
(古今集五) 神南の山を過ぎ往く秋なれば
(千五百番歌合) 立田川にぞ幣は手向くる
(拾遺歌) 山巡り時雨や過ぐる松風の
(拾遺歌) 吹くかき聞けは軒の玉水
(拾遺歌) みてぐらの立つや五十鈴の川浪に
(古今集五) 山の紅葉も幣や手向くる
(古今集五) 立田川錦織り掛く神無月
(金葉集四) 時雨の雨を經緯にして
(金葉集四) 御室山紅葉散るらと旅人の
(神歌) 菅の小笠に錦織り掛く



こそ	か	や	そ
----	---	---	---

(新勅撰集十二) すするすれ結句の例
(新勅撰集十二) 色に出で、今ぞ知らする人知れず
(千載集一) 思ひ詫びつる深き心を
(千載集一) 山櫻霞籠めたる在り所をば
(月清集) つらき物から風を知らする
(月清集) 吹く風や空に知らする芳野山
(後撰集十六) 雲に天ぎる花の白雲
(後撰集十六) 吾か宿を何時刷らしてか楡の葉を
(六百番歌合) 刷らと顔には折りにおこする
(六百番歌合) 秋と言へは鶉鳴くなり小萩原
(源氏物語雜傳) 鹿の音をこそ花に任かすれ
(源氏物語雜傳) 櫻こそ思ひ知らすれ咲き匂ふ

主格隠れ

花も紅葉も常ならぬ世を

吾が君にわけは戀ふらと給ひたる

つはなを食へといや瘦せに瘦す

「つづるつれ結句」の例

音無しの川とを遂に流れ出づる

言はで物思ふ人の涙は

老いにける齡も皺も延ぶはかり

菊の露にぞ今朝はそぼつる

難波瀉苳り積む蘆のあとつゞの

一重も君を吾や隔つる

九重に霧や隔つる雲の上の

月を遙かに思ひ遣るかな

を

や

か

こそ

「ぬぬるぬれ結句」の例

都には誰をか君は思ひ出づる

都の人は君を戀ふめり

み熊野の浦の濱ゆふ幾重ね

我をか君が思ひ隔つる

下り立ては身こそほつれ春の田の

ふみかく事も今は止めてん

誰ぞこの三輪の檜原も知ら無くに

心の杉の吾を尋ぬる

鳥の子はまだ雛ながら立ちて去ぬ

詮の見ゆるは巢守りなりけり

戀ひとさに今日を尋ぬる奥山の

は

の

日影の露に袖は濡れつゝ、
かほ鳥の聲も聞きしに通ふやと

茂みを分けて今日を尋ぬる

「ふふるふれ結句」の例

曉の鐘ぞ哀を打ち添ふる

浮き世の夢の覺むる枕に

山藍もて摺れる衣の赤紐の

長くぞ吾は神に仕ふる

女郎花涙に露や置き添ふる

手折れはいとゞ袖の萎るゝ

住の江の年経る松の齡をは

返るゝも波や算ふる

か

何とかもこゝたく戀ふる郭公

鳴く聲聞けは戀こそ勝れ

定め無く數多に掛くる武藏鎧

いかに乘ればか踏みは違ふる

身の憂さを忘草こそ岸に生ふれ

うべ住吉とと蟻も言ひけり

こそ

「むむるむれ結句」の例

今とはと詫びに物をさへ蟹の

衣に掛かり吾を頼むる

抑へつゝ吾は袖にぞせき止むる

船超す汐になさじと思へは

の

ぞ

世の中は何れか指して吾がならん

や	か	こそ	起
<small>(續千載集五)</small> 行き止まるをぞ宿と定むる <small>いと</small> 又虫や恨むる浅芽原 置き添ふ霜の夜寒重ねて <small>(万葉集十五)</small> 戀ひ死なは戀ひも死ねとや郭公 物思ふ時に來鳴き響むる <small>(万葉集十一)</small> あと引の山櫻戸を開き置きて 吾が待つ君を誰か止むる <small>(續古今集十八)</small> 心をは吾が心こそ慰むれ 粗増と事の間はず談りに <small>(前集)</small> 白浪の籬の島に立ち寄れは 登こそ常に誰と咎むれ <small>(万葉集十九)</small> 郭公今來鳴き初む菖蒲草			

れ隠	の	は	を
<small>「ゆゆるゆれ結句」の例</small> <small>(拾遺集三)</small> 都出で、夜半にや來つる郭公 曉掛けて聲の聞こゆる <small>(五社百首)</small> 夢路には馴れと宿見ゆ現には 宇都の山邊の蔦葺ける庵 <small>(金葉集一)</small> 雪ととも紛ひも果てず卯の花は 暮るれは月の影かとも見ゆ <small>(古今集二十)</small> 近江のや鏡の山を立てたれは 豫てぞ見ゆる君が千年は <small>(後撰集七)</small> 秋風に誘はれ渡る雁が音は 雲居遙かに今日を聞ゆる			

こそ	か	や
<small>(新古今集十六)</small> 白浪の超ゆらん末の松山は <small>(中務集)</small> 花とや見ゆる春の夜の月 <small>(中務集)</small> 撫子の花咲き初むる夏の野に <small>(後撰集十三)</small> 今日蜩の聲や聞ゆる <small>(後撰集十三)</small> 木隠れて瀧つ山水何れかは 目にも見ゆる音にこそ聞け <small>(万葉集十五)</small> 吾妹子がいかに思へかぬは玉の 一夜も落ちず夢にと見ゆる <small>(古今集二)</small> 色よりも香こそ哀と思ほゆれ 誰が袖觸れと宿の梅をも <small>(永萬三歌合)</small> 五月雨に萎れつゝ鳴く郭公 濡れ色にこそ聲も聞ゆれ		

も	は	の	起辭隠れ	主格隠れ
			<small>(万葉集三)</small> 大宮の内まで聞こゆ網引きすと <small>(万葉集十七)</small> 漣とにの崎の荒磯に寄する波 <small>(音)</small> いやさくく古へ思ほゆ	<small>(中務集)</small> 初雁の夜深かりつる聲により <small>(古今集十五)</small> 今夜には來ぬ人待たる掻き曇り <small>(堀川後百首)</small> 宿にして錦と見るは嬉しくて さすがに木の葉散るは惜とまる <small>(六百番歌合)</small> 花はなほその姿とも見え分かる

るるゝるれ結句の例

	そ	や	か
<p>枯野は虫の聲を戀しき 夏衣<small>(拾遺集十三)</small>薄きながらを頼まるゝ 一重なるしも身に近けれは 天<small>(古今集十七)</small>の川雲の水脉<small>ミヅナ</small>にて早けれは 光り止めず月を流るゝ 棚機<small>(新古今集四)</small>は今や別かるゝ天の川 河霧立ちて千鳥鳴くなり 夢<small>(古今集十五)</small>にだに逢ふ事難く成り往くは 吾やいを寢ぬ人や忘るゝ 見も見ずも誰と知りてか戀ひらるゝ<small>(大和物語)</small> 覺束無みの今日の眺めや 守りませと夜はなほこそ頼まるれ<small>(伊勢集)</small></p>			

	れ隠辭起	こそ
<p>寝る間もあらは超えんと思へは 蟲<small>(古今集十二)</small>のごと聲に立てゝは鳴かねども 涙のみこそ下<small>タ</small>に流るれ 立田川紅葉流る<small>(古今集五)</small>神奈備の 御室の山に時雨降るらと うらるうれ結句の例</p>	<p>証歌未だ見あたらす くくけ結句の例 春立<small>(古今集一)</small>ては花とや見らん白雪の 掛かれる枝に鶯の鳴く 思<small>(後撰集十)</small>はんと頼めと人は在りと聞く 言ひと言の葉何地去<small>ナニ</small>にけん</p>	<p>は</p>

や	ぞ	も	
---	---	---	--

野邊(古今集一)近く家居とせれば鶯の

鳴くなる聲は朝なく聞く

久堅(新撰集十三)の天照る月も隠れ往く

何によそへて君を忍はん

千鳥(古今集七)鳴く佐保の河霧立ちぬらと

山の木の葉も色變はり往く

世と共に流れてぞ往く涙川

冬も氷らぬ水泡なりけり

曉(古今集十五)の鳴の羽搔き百羽搔き

君が來ぬ夜は吾ぞ數搔く

暮る(古今集三)かど見れば明けぬる夏の夜を

飽かずとや鳴く山郭公

れ隠辭起	こそ	か	
------	----	---	--

春(古今集三)霞 棚引く山の櫻花

移ろはんとや色變はり往く

蓮葉(古今集三)の濁りにまぬ心もて

何かは露を玉と欺く

よそ(後撰集九)に降る雨とこそ聞け覺束な

何をか人の戀ひ路と言ふらん

君(拾遺集十二)はた袖はかりをやくたすらん

逢ふには身をも換ふところ聞け

矢田(新古今集六)の野に浅芽色着く荒乳山

峯の沫雪寒くぞ有るらと

秋(古今集十九)風に綻びぬらと藤袴

つゞり刺せてふ蟋蟀鳴く

「すすせ結句」の例

愚(古今集十二)なる涙を袖に玉は爲す

吾はせきあへず瀧つ瀬なれば

眞菅生(千載集十六)ふる山下水に宿る夜は

月さへ草の庵をを刺す

浦風(續後撰集)やはに浪超す濱松の

根に顯はれて鳴く千鳥かな

皇(拾遺集)上の昔普き恵みをや

この水無月の民に施す

露(後撰集六)ならぬ吾が身と思へば秋の夜を

斯くこそ明かせ起き居ながらに

問ふ(細川百首)人も無き山里の淺芽生は

そ || や || こそ ||

起辭隱れ

心の儘に茂りこそ増せ

四方山の冬の景色に成る儘に

小野の炭竈煙立ち増す

「つつて結句」の例

人(續拾遺集十一)知れぬ心や兼ねて馴れぬらん

粗増と事の面影に立つ

血(古今集十六)の涙落ちてぞ瀧ぎつ白川は

君が世までの名にこそ有りけれ

天(後撰集五)の川岩超す浪の立ち居つゝ

秋の七日の今日をを待つ

此所(六帖)にまだ吾が飽かぬ月を山の端の

遠ちの里には遅とを待つ

の || そ || や ||

こそ	起辭隱れ	の	は
<p>(拾遺集四) 人知れず春をこそ待て 拂ふべき 人無き宿に降れる白雪 (古今集十四) 宮城野の本あらの小萩露を重み 風を待つごと君をこそ待て 冬の夜の月と雪とを見る程に 花の時さへ面影に立つ</p>	<p>「ふふへ結句」の例 (千載集五) 夕霧や秋の哀を籠めつらん 分け入る袖に露の置き添ふ (万葉集十五) 紅葉は今は移ろふ 吾妹子が 待たんと言ひし時の経往けは (金葉集五) 曇り無き豊のあかりにあふみなる</p>		

も	ぞ	や	か
<p>(蝦子集四) 朝日の里は光りさと添ふ 今宵とも雲居の月も光り添ふ (古今集十五) 秋の深山を思ひこそ遣れ 天響の音信れとぞ今は思ふ 吾か人かど身をたどる世に</p>	<p>(古今集一) 春來ぬと人は言へども鶯の 鳴かぬ限りは有らじとぞ思ふ (後撰集八) 神無月限りとぞ思ふ 紅葉はの 止む時も無く夜さへに降る</p>	<p>(後拾遺集十一) 頼むるに命の延ぶる物ならば 千年も斯くて在らんとぞ思ふ</p>	<p>(千載集六) 澄む水を心無とは誰か言ふ</p>

こそ

氷を冬の初めをも知る
(古今集二) 折りつれは袖こそ句へ梅の花
 有りどや此所に鶯の鳴く
(古今集八) 秋萩の花をば雨に濡らせども
 君をはまして惜じとこそ思へ

「むむめ結句」の例

は

(伊勢物語) 庵多きあでの田長はなほ頼む
 我が住む里に聲し絶えずは
(古今集十八) 吾が庵は都の辰已然そ住む
 世を宇治山と人は言ふなり
(古今集十七) 古の野中の清水ぬるけれそ
 本の心を知る人を汲む

そ

や

(類古今集五) つれも無き妻をや頼む秋風の
 身に寒き夜は鹿も鳴くなり
(類古今集十七) 四方の海に汐汲む蟹の心から
 焼くとは斯かる歎きを積む
(續後撰集十四) 棚機を何か羨む逢ふ事の
 稀れなる程は劣りともせじ
(万葉集十九) 春まけて物悲しきに小夜更けて
 羽振り鳴く鳴誰が田にか棲む
(藤原御集) 今日よりは枝こそ撓め菊の葉に
 夕露繁く置くにや有るらん
(後撰集二) 春の野に心をだにも遣らぬ身は
 若菜は摘まで年をこそ摘め

か

こそ

起辭隱れ

さゞ波や國つ御神の心さびて
舊き都に月獨り澄む

「るれ結句」の例

霜(古今集五)の經露マテの緯マテこそ弱からと

山の錦の織れは且つ散る

此(後拾遺集十五)の頃の夜半の寢覺は思ひ遣る

いかなる駕か霜拂ふらん

何所(後撰集二)とも春の光りは分か無くに

まだみ芳野の山は雪降る

夕暮(後撰集九)れは松にも掛かる白露の

起くる朝や消えは果つらん

筑波嶺(古今集十八)の木の本ごとニ立ちぞ寄る

そ

春の深山の陰を戀ひつゝ
こき散らす瀧の白玉拾ひ置きて

世の憂き時の涙にぞ借る

郭公(後撰集四)來ては旅とや鳴き渡る

吾は別れの惜とまき都を

白雲(後撰集三)と見えつる物を櫻花

今日は散るとや色異に成る

花散らす風の宿りは誰か知る

吾に教へよ往きて恨みん

難波瀉(古今集十八)恨むべき間も思ほえず

何所をみつの蟹とかは成る

逢(古今集十五)ひ見ねは戀ひこそ優れ水無瀬川

か

や

こそ	起辭隱れ	の	は
<p>何に深めて思ひ初めけん <small>(古今集十一)</small> 明け立ては蟬の折りはへ鳴き暮らし 夜は螢の燃えこそ渡れ <small>(万葉集十五)</small> 沖邊より船人登る喚び寄せて いさ告げ遣らん旅の庵りを <small>(古今集十七)</small> 難波瀉汐満ち來らとあま衣 たみ野の嶋に鶴鳴き渡る</p>	<p>ららんらめ結句の例 <small>(天和物語)</small> 山里に吾を止めて別れ路の 雪のまに深くなるらん <small>(拾遺集一)</small> 櫻色に吾が身は深く成りぬらん 心にちみて花を惜とめは</p>		

も	ぞ	や
<p>霧立ちて雁を鳴くなる片岡の <small>(古今集五)</small> 朝の原は紅葉とぬらん <small>(拾遺集七)</small> み吉野も若菜摘むらん眞木向の 檜原霞みて日數經ぬれは <small>(後撰集十四)</small> 吾が戀ひと君があたりを離れねは 降る白雪も空に消ゆらん <small>(後撰集十五)</small> 蓮葉の灰にそ人は思ふらん 世には戀ひ路の中に生ひつゝ <small>(古今集七)</small> 春日野に若菜摘みつゝ萬代を 祝ふ心は神ぞ知るらん <small>(古今集四)</small> 鳴き渡る雁の涙や落ちつらん 物思ふ宿の萩の上の露</p>		

	こそ	れ隠格主	れ隠辭起
袖漬ちてむすびと水の氷れるを <small>(古今集一)</small>	春立つ今日の風や解くらん <small>(古今集十三)</small>	浅みこそ袖は積づらめ涙川 <small>(古今集十三)</small>	身さへ流ると聞かは頼まん <small>(古今集十七)</small>
大原や小鹽の山も今日こそは <small>(古今集十七)</small>	神代の事も思ひ出づらめ <small>(後拾遺四)</small>	いとゞしく露けかるらん棚機の <small>(後拾遺四)</small>	寝ぬ夜に逢へる天の羽衣 <small>(後撰集七)</small>
思ひ出で、問ふには有らじ秋果つる <small>(後撰集七)</small>	色の限りを見するなるらん <small>(音)</small>	君が往く越の白山知らねども <small>(古今集八)</small>	

	は	も	そ
雪のまにく跡は尋ねん <small>(古今集四)</small>	月草に衣は摺らん朝露に <small>(古今集四)</small>	濡れての後は移ろひぬども <small>(古今集五)</small>	戀とくは見ても忍はん紅葉はを <small>(古今集五)</small>
吹きな散らんと山下との風 <small>(古今集五)</small>	秋霧は今朝はな立ちそ佐保山の <small>(古今集五)</small>	柞の紅葉よそにても見ん <small>(拾遺集五)</small>	動き無き巖の果ても君を見ん <small>(拾遺集五)</small>
未通女の袖の撫で盡すまで <small>(後撰集七)</small>	早もて齡延ぶてふ花なれは <small>(後撰集七)</small>	千代の秋にそ陰は茂らん <small>(古今集五)</small>	植ゑし植ゑは秋無き時や咲かざらん <small>(古今集五)</small>

や	こそ	起辭隱れ	主格隱れ
<p>花こそ散らぬ根さへ枯れぬや <small>(古今集四)</small> 棚機に貸しつる糸の打延へて 年の緒長く戀ひや渡らん <small>(古今集十五)</small> 吉野川よとや人こそつらからぬ 早く言ひてと事は忘れじ <small>(古今集九)</small> 夕月夜覺束無きを玉櫛匣 二見の浦は明けてこそ見ぬ <small>(古今集一)</small> 山高み人もすさめぬ櫻花 いたくな詫びを吾見囉さん <small>(古今集十七)</small> 鏡山いざ立ち寄りて見て往かん 年經ぬる身は老いや爲ぬると</p>	<p>「けんけんけんけん」</p>	<p>「けんけんけんけん」</p>	<p>「けんけんけんけん」</p>

の	は	も	ぞ
<p>御園生の百木の梅の散る花の <small>(萬葉集十七)</small> 天に飛び上り雪と降りけん <small>(新拾遺三)</small> 花ゆゑにあかぬ別れは習ひけん 思ひまらずも歸る春かな <small>(新古今十七)</small> 荒れ果て、風も障らぬ苔の庵に 我はなくとも露は漏りけん <small>(源氏柏木)</small> なき人も思はさりけん打捨て、 夕の霞君きたれとは <small>(新古今十八)</small> あはれとて羽さみ立てと古は 世を背けとも思はさりけん <small>(拾遺九)</small> 惡しからじ善からんとてぞ別れけん 何か難波の浦は住みうき</p>	<p>「けんけんけんけん」</p>	<p>「けんけんけんけん」</p>	<p>「けんけんけんけん」</p>

こ	そ	や	か	こ	そ
---	---	---	---	---	---

君が經(千五百番)ん千代のためとぞ小松原

小鹽の山も祝ひ初めけん

夏山(古今三)に戀とき人や入りにけん

聲ふりたて、鳴く郭公

たらちめは斯かれとて(後撰十七)もうは玉の

我が黒髪は撫ですや有りけん

東路(古今十二)の小夜の中山なかくに

何しか人を思ひ初めけん

逢ふまでの形見とて(今古十四)こそとゞめけん

涙に浮かぶ藻芥モヅメなりけり

唐衣(後撰十一)たつを惜しみと心こそ

二村山の關となりけん

主格隠れ

こ	そ	は	も	や	こ	そ
---	---	---	---	---	---	---

よそ(古今十五)にのみ聞かまじものを音羽川

渡ると無ににみ(音)なれそめけん

涙川(古今十一)なに水上を尋ねけん

物おもふ時の吾が身なりけり

てんてんてめ

たのめこと言の葉今は返とてん(古今十四)

吾が身舊るれはおき所なと

忘れずは尋ねもとてん(六帖)三輪の山

標マサにうゑと杉は無くとも

見(實之集)てのみや立ち暮らとてん櫻花

散るを惜とむに詮かとなければ

散りぬれは戀ふれ(古今一)と驗となきものを

は	の	れ隠格主	れ隠辭起
---	---	------	------

今日こそ櫻折らは折りてめ
 山櫻(拾遺)心の色を誰見てん
 幾夜の花のそこに宿らは
 世に經(古今十八)れは憂こそまされ三芳野の
 岩の陰路(音)ふみならとてん
 櫻花(後撰三)今日(音)よく見てん吳竹の
 一夜の程に散りもこそすれ

「なんなんなめ」
(新古今十五)哀なり轉寐にのみ見と夢の
(古今十八)いさ此所に吾が世は經なん菅原や
 伏見の里の荒れまくも惜と

こそ	か	や	ぞ	も
----	---	---	---	---

(新古今一)焼かずとも草はもえなん春日野は
(古今十八)いさ櫻吾も散りなん一盛り
(新千載十四)戀ひとくは都の松に鶯の
(後撰六)秋の野に夜もや寝なん女郎花
(新勅撰四)飛鳥川往來の岡の秋萩は
(古今十四)飽かでこそ思はん中は離れなめ
 そをだに後の忘れがたみに

たゞ春の日に任かせたらなん
 ありなは人に憂き目見えなん
 鳴きてぞ來なん花は散るとも
 花の名をのみ思ひかけつゝ
 今日降る雨に散りか過ぎなん

主格隠れ

あゝひきの山のまに（古今十八）く隠れなん
 憂き世の中は在る詮（音）もなし
 想ひ（伊勢物語）あらは葎の宿に寝もとなん
 ひしきものには袖をとつゝも
（古今十二）人忘れず思へは苦と紅の
 末摘花の色（音）に出でなん
（拾遺十五）いつ方に往き隠れなん世の中に
 身の在れはこそ人もつらけれ

「ましましまましか」

は

世（古今一）の中に絶えて櫻の無かりせば
 春の心は長閑けからま（拾遺十九）し
 世の中はいかゞはせま（音）と薬山の

も	そ	や	か	こそ
---	---	---	---	----

青葉の杉の標（古今十四）だに無と
 あひ見ずは戀ひ（音）と事も無からま（古今一）し
 音に人を聞くべかりける
 今日（古今一）來ずは明日は雪とそふりなま（音）し
 消えずは在りとも花と見ま（古今一）しや
（古今一）春來れは雁かへるなり白雲の
 路ゆきぶりに言や傳（音）てま（音）し
（万葉十三）神無月雨間もおかず降り（音）にせば
（金葉四）年來れぬとはかりこそは聞かま（音）しか
 誰が里の間に宿か借らま（音）し
 吾が身の上に積もらざりせば
（後拾遺十三）なかく（音）に憂かりとま（音）しに止み（音）にせば

けらとけらとけらと

時雨れつゝ色まさりゆく草よりも

人の心ぞ枯れにけらとな

夜を寒み籬の草を見わたせば

今朝ぞ初霜おきにけらとな

塚のうへに木の枝なびけり聞かごと

ちぬ男にも寄るべけらとも

そ〇〇(そよ)結句の例

淺とてふ事をゆゝとみ山の井は

堀りと濁りに影は見えぬぞ

笈土よ待て事間はん水上は

いかはかり吹く峯の嵐ぞ

そ

れ隠格主

は

れ隠格主

も

見る夢のうつゝに成るは尋常ぞ

現の夢に成るをかなとさき

花薄まねかほこゝに止まりあん

いづれの野邊もつひに住みかぞ

誰もみな露の身をかと思ふにも

心とまりと草のいほかな

名に愛で居れるばかりを女郎花

吾落ちにきと人に語るな

かねてより思ひと事をふと柴の

こるはかりなる歎きせんとは

いかなりと時を夢に見と事は

それさへにこそ忘れにけれ

急(後拾遺四)ぎつゝ、吾こそ來つれ山里に

何時(それには)より澄める秋の月ぞも。

「にぞ〇〇結句」の例

白(六帖)妙の衣片敷き春日野に

若菜摘みとは誰が爲にぞは。

は

「とぞ〇〇結句」の例

君(後撰二十)が爲祝ふ心の深けれは

聖の御代の跡(八は)ならへとぞ

桂(徒然草百四段)の木の大なるが隠るゝまで今も見送りたまふ

資朝卿(資朝卿也)云云犬の淺ましく老いさらばひて毛はげ

たるを云云内府(資朝卿也)へまぬらせられたりけるとぞ

れ隠格主

「とか〇〇結句」の例

秋(古今五)の月山邊朗かに照らせるは

落つる紅葉の敷を見よと

刈(古今五)れる田に生ふる穧(いぢ)の穂に出でぬは

世を今更に秋果てぬと

内(徒然草百七十八段)なる女房の中に別殿の行幸には晝の御坐の御

劔にてこそ有れと云云その人ふるき典侍なりけ

るとかや

聖德太子(徒然草六段)の御墓を云云子孫あらせじと思ふなり

と侍りけるとかや

「にや〇〇結句」の例

人の物を問ひたるに知らずとも有らじ在りの

れ隠格主

れ隠辭起

は

は	れ隠格主	は
<p>儘に言はんは<small>（後撰撰心）</small>まごがまご<small>（八の）</small>とにや<small>（源氏物語桐壺）</small>心まごはすやうに云云 <small>（後撰撰心）</small>冬來ぬと言ふはかりにや<small>（八の）</small>神無月 <small>（それ）</small>今朝は時雨の降りまさりつゝ <small>（それ）</small>大願の力にや<small>（源氏物語桐壺）</small>昨日なん都よりまうで來つる <small>（それ）</small>何れのおほん時にか<small>（源氏物語桐壺）</small>女御更衣云云</p>	<p>「とよ〇〇結句」の例 <small>（万葉二十）</small>吾妹子が忍びにせよとつけと紐 <small>（金葉八）</small>糸に成るとも吾は解かじとよ <small>（金葉八）</small>あさましやこは何事のさまそとよ <small>（大和物語）</small>戀ひせよとても生れざりけり <small>（大和物語）</small>吾はさは雪ふる空に消えぬとや</p>	<p>「とよ〇〇結句」の例 <small>（古今二）</small>立ちかへれども明けぬ板戸は <small>（古今二）</small>やよや待て山郭公言傳てん <small>（それ）</small>吾世の中に住みわびぬとよ <small>（それ）</small>夢かどよ見と面影も契りとも <small>（狭衣）</small>忘れずながら現ならぬは <small>（吾は）</small>あふ坂をなほ往き歸り感へとや <small>（吾は）</small>關の鎖ともかたから無くに</p>

れ隠辭起	れ隠格主	の	も
<p>「はや〇〇結句」の例 <small>（古今二十）</small>みつくきの岡の館に妹と吾と <small>（六百番歌合）</small>夜川立つ五月來ぬらと瀬々少女 <small>（六百番歌合）</small>八十伴の男も篝さすはや</p>	<p>「はや〇〇結句」の例 <small>（古今二十）</small>みつくきの岡の館に妹と吾と <small>（六百番歌合）</small>夜川立つ五月來ぬらと瀬々少女 <small>（六百番歌合）</small>八十伴の男も篝さすはや</p>	<p>「はや〇〇結句」の例 <small>（古今二十）</small>みつくきの岡の館に妹と吾と <small>（六百番歌合）</small>夜川立つ五月來ぬらと瀬々少女 <small>（六百番歌合）</small>八十伴の男も篝さすはや</p>	<p>「はや〇〇結句」の例 <small>（古今二十）</small>みつくきの岡の館に妹と吾と <small>（六百番歌合）</small>夜川立つ五月來ぬらと瀬々少女 <small>（六百番歌合）</small>八十伴の男も篝さすはや</p>

れ隠格主	ひ結徒	の	は
<p>君が住む宿の梢のゆくも <small>(拾遺六)</small> 隠るゝまでに<small>(吾は)</small>返り見とはや <small>(古今十一)</small>春日野の雪間を分けて生ひ出で来る 草のはつかに見えと君はも <small>(古今十七)</small>笹の葉に降り積む雪の末を重み 本くだちゆく吾が盛りはも</p>	<p>「かな〇〇結句」の例 <small>(古今四)</small>待つ人に有らぬものから初雁の 今朝鳴く聲のめづらしきかな <small>(古今四)</small>河風の涼しくも有るか打寄する 波と共にや秋は立つらん <small>(後撰十四)</small>白雪の今朝は積もれる思ひかな</p>		

も	れ隠格主
<p>逢はでふる夜の程も經なくに <small>(古今四)</small>女郎花うしろめたくも見ゆるかな 荒れたる宿に獨り立てれば どゞめあへすうべも年とは言はれけり 然もつれなく過さる齡か <small>(古今十六)</small>朝露の晩稻の稻葉假初に 憂き世の中を思ひぬるかな <small>(後拾遺二)</small>櫻花句ふ名残に大方の 春さへ惜しくおもほゆるかな <small>(金葉三)</small>往く人を招くか野邊の花薄 今宵も此所に旅寝せよとや</p>	<p>「かも〇〇結句」の例</p>

れ隠格主	れ隠辭起	は
<p>春霞<small>(古今一)</small>色の千種に見えつるは</p> <p>棚引く山の花の影<small>か</small>も</p> <p>涙<small>(伊勢物語)</small>にぞ濡れつゝまぼる世の人の</p> <p>つらき心は袖の雪<small>か</small></p> <p>たま<small>(古今十三)</small>くしげ明けは君が名立ちぬべみ</p> <p>夜深く來<small>こ</small>とを人見けん<small>か</small>も</p> <p>天<small>(古今九)</small>の原ふりさけ見れば春日<small>(この月は)</small>ある</p> <p>御笠<small>(拾遺十三)</small>の山に出でし月<small>か</small>も</p> <p>秋<small>(それ)</small>の夜の月<small>か</small>も君は雲がくれ</p> <p>あは<small>(新古今十七)</small>と見ねほ心戀ひと<small>き</small></p> <p>晴<small>(あれ)</small>る、夜の星<small>か</small>河邊の螢<small>か</small>も</p> <p>吾が住む方の螢のたぐ火<small>か</small></p>		

「かは○○やは結句」の例

れ隠格主	れ隠辭起	は
<p>契<small>(古今四)</small>りけん心をつらき棚機<small>の</small></p> <p>年<small>(詞花七)</small>に一度あふはあふ<small>か</small>は</p> <p>くれなるに涙の色も成りにけり</p> <p>變<small>(古今二)</small>はるは人の心のみ<small>か</small>は</p> <p>散る花の鳴くにと止まるものならは</p> <p>吾<small>(古今十九)</small>鶯に劣らま<small>と</small>やは</p> <p>思<small>(古今十九)</small>ひけん人をそ共に思はま<small>と</small></p> <p>まさしや報い無かりけり<small>やは</small></p> <p>い<small>(古今十四)</small>その上ふるの中道なかく<small>に</small></p> <p>見<small>(古今八)</small>ずは戀ひと思はま<small>と</small>やは</p> <p>限り無き雲居のよそに別かる<small>とも</small></p>		

らめや〇〇(めや)結句の例	も	れ隠辭起	れ隠格主	れ隠辭起
人を心 <small>(吾は)</small> におくらさんやは	あし <small>(後撰十)</small> ひきの山下とよみ鳴く鳥も 吾がごと絶えず物おもふらめや	津 <small>(古今十三)</small> の國の難波の蘆の芽もはるに えげき吾が戀ひ人知るらめや	知るらめや身こそ人目を憚りの 關に涙は止まらざりけり	秋 <small>(古今十三)</small> なれは山とよむまで鳴く鹿に 吾おとらめや獨りぬる夜は 今更 <small>(新古今一)</small> に雪ふらめやかげろふの もゆる春日と成りにしものを

れ隠格主	格主
<p>笹<small>(古今十三)</small>の葉に置く初霜の夜を寒み 植<small>(古今五)</small>ゑとうゑは秋なき時やさかざらん 花<small>(新古今一)</small>こそ散らめ根さへ枯れめや たね<small>(古今十一)</small>と有れば岩にも松は生ひにけり 戀<small>(吾は)</small>ひをこひはあはざらめやは</p>	<p>はや〇〇(まほしたと)結句の例 あたら夜<small>(後撰三)</small>の月と花とを同じくは 可<small>(吾は)</small>恰<small>(吾は)</small>えれらん人に見せはや こ<small>(後拾遺一)</small>ろ有らん人に見せはや津<small>(吾は)</small>の國の 難波わたり<small>(吾は)</small>の春のけときを 五月<small>(古今三)</small>こは鳴きも舊りなん郭公</p>

れ隠

まだときほどの聲を聞かはや
(音)
(徒然草五段) あるか無きかに門さしてめて待つ事も無く明か
(入) と暮らしたるさる方に在らまほと云云
(徒然草一段)
(容貌) めでたと見ると見る人の心おとりせらるゝ云云

「とが〇〇もが」結句の例

(古今二十) 甲斐が嶺を朗にも見とがけ、れなく
 横ほり臥せる小夜の中山
(金葉三) 秋ならで妻よふ鹿を聞きとがな
 折りから聲の身にはゑむかど
(好思集) 心うと深き山にも入りにとが
 長閑かに居りてうき世過ぐさん
(拾遺十三) 夢をだにいかで記念に見てとがな

れ隠格主

は

も

れ隠格主

「なん〇〇なん」結句の例

あはでぬる夜のなぐさめにせん
(新勅撰八) 世の中は常にもがな渚こぐ
(万葉三十) 父母も花にもがや草枕
(古今十二) 旅は往くともさゝごて往かん
(人) 心がへするものにもが片戀ひは
 苦ときものど人に知らせん
(後撰六) 吾が宿の尾花が上の白露を
(音) 消たすて玉にぬくものにもが
(伊勢物語) 人知れぬ吾が通ひ路の關守は
 香々ごとに打も寝なゝん

	も	れ隠格主
忘草枯れもやするとつれも無き <small>(古今十五)</small>	人の心に霜はおかなん <small>(後撰十七)</small>	岩の上に旅寝をすれはいと寒と <small>(後撰十七)</small>
おとなべて峰も平垣に成りなへん <small>(後撰十七)</small>	山の端なくは月も入らじを <small>(夫木)</small>	稀に來て戀ひもつきぬに急ぎ往く <small>(夫木)</small>
		人をおさへの關も居るなん <small>(君)</small>
		苔の衣を吾に貸さなん <small>(拾遺十七)</small>
		小倉山峰の紅葉心あらは <small>(汝)</small>
		今一度の行幸またなん <small>(伊勢物語)</small>
		彦星に戀ひはまさりぬ天の河 <small>(伊勢物語)</small>

「てよ〇〇よね」(けせてへめれ)結句の例

は	れ隠格主	れ隠辭起	辭起
萩の露玉にぬかんと取れは消ぬ <small>(古今四)</small>	久堅の天の河原の渡守 <small>(古今四)</small>	住の江に舟さしよせよ忘草 <small>(土佐日記)</small>	人二つの矢を持つことなかれ
よし見ん人は枝ながら見よ <small>(拾遺十六)</small>	君渡りなは楫かくしてよ <small>(土佐日記)</small>	驗ありやとつみて往くべく	
春風は花の無き間に吹きはてぬ <small>(拾遺十六)</small>	さきなは思なくて見るべく		
へだつる關を今はやめてよ			

「なかれ〇〇結句」の例

或人弓射る事を習ふに云師のいはく「初心の

人二つの矢を持つことなかれ

れ隠	れ隠格主	は	れ隠辭起
----	------	---	------

まじ○○結句の例

(徒然草十五)
 ぼろく多くあつまりて云云前の川原へ参りあ
 はん(拾遺八)あなかしてわきざしたち何方をも見つき
 たまふ(拾遺八)な(君)云云
 忘るなよ程は雲居に成りぬとも
(徒然草百九段)
 空ゆく月のめぐりあふまで
 高名の木のぼりと謂ひと男(後)云過ちすな心して
 下りよ云云
(古今一)
 春日野は今日はな焼きそ若草の
 妻もこもれり吾も籠れり
(古今五)
 戀ひとくは見ても忍はん紅葉を
 「吹きな散らそ山おろとの風」

れ隠格主	も	は
------	---	---

(詞花十)
 この世にはまたも見るまじ梅の花
 散りくならん事をかなとき
(夫木屋房卿)
 河超との柴積み車いかゞする
 氷のくさび冬は堪へまじ
(古今八)
 唐衣立つ日は聞かじ朝露の
 おきてと往けは消ぬべきものを
(古今二十)
 君が代は限も有らじ長濱の
 眞砂の数は読み盡くすとも
(古今十九)
 身は捨てつ心をだにもはふらさじ
 つひにはいかゞなると知るべく
(古今一)
 宿近く梅の花植ゑじあぢきなく
 待つ人の香にあやまたれけり

疑問結句起結照應法の証歌

「なぞなぞ〇結句」の例

(伊勢物語) いにしへの句ひはいつら櫻花

こけるからとも成りにけるかな

(後撰三) 故郷の君はいつらと待ち間は

いつれの空の霞と言はまじ

(後撰十八) 世の中はいかにやいかに風の音を

聞くにも今は物やかなとき

(未だ能意) この世をも後をもいかにいかにせん

燃えん煙も結ばれつゝ

(後撰十三) 雨ふれを降らぬを濡るゝ我が袖の

かゝる思ひに乾かぬやなぞ

は

も

や

起辭隠れ 主格隠れ

(拾遺十四) 玉川にさらす手づくりさらしに

昔の人の戀ひときやなぞ

(新古今四) 萩が花真袖にかけて高圓の

尾の上の宮に領巾ふるやたれ

(古今一) 春霞立てるやいつこ三芳野の

吉野の山に雪は降りつゝ

(玉葉三) 露わけん秋の朝けは遠からで

都や幾日真野の萱原

(後撰十三) 思ふてふ言の葉いかになつかしな

後うき物と思はずもがな

(拾遺二十) 思ひ知る人も有りける世の中を

(後撰) いつを何時とて過ぐすなるらん

物名結句起結照應法の証歌

「物物結句」の例

	は	も
吾が庵は三輪の山本戀ひとくは <small>(古今十八)</small>	訪ひ來ませ杉立てる門 吾が庵は都の辰巳然ぞ住む <small>(古今十八)</small>	世を宇治山と人は言ふなり 明石瀉るしまをかけて見渡せば <small>(續古今一)</small>
霞のうへも沖つ白浪 盗人と言ふもことわり小夜中に <small>(金葉八)</small>	人の心を取りに來たれば 年ふれど變りもやらぬ名取川 <small>(續後撰十七)</small>	憂き身を今は瀬々の埋れ木

	ぞ	や	こそ
ひたふるに思ひな詫びを舊るさるゝ <small>(後撰十三)</small>	人の心はそれを尋常 神無月時雨降りおける櫓の葉の <small>(古今十八)</small>	名におふ宮の古言をこれ 唐錦秋の記念や立田山 <small>(新古今六)</small>	散りあへぬ枝に嵐吹くなり 空蟬の鳴く音やよその森の露 <small>(新古今十二)</small>
ほしあへぬ袖を人の問ふまで 人ならば思ふ心を言ひてまじ <small>(新古今十五)</small>	よじやさこそは倭織の麻環 かた見こそあだの大野の萩の露 <small>(新後撰十五)</small>	うつろふ色は言ふ詮も無し	

今霄(天和物置)こそ涙の河に居る千鳥ト
 鳴きて歸ると君は知らずや
 戀(金葉七)ひ死なは心づくしに今までも
 頼むれはこそいきの松原

接續結句起結照應法の證歌

「つゝ〇〇結句」の例

花薄穂に出で、戀ひは名を惜しみ
 下結ふ紐の結ばれつゝ
 春霞(古今)立てるや何所三芳野の
 芳野の山に雪は降りつゝ
(後撰六)秋の田の苅穂の庵の管を粗み
 吾が衣手は露に濡れつゝ

の	は
---	---

も

故郷(後撰八)の雪は花とを降りつもる
 眺むる吾も思ひ消えつゝ
(古今六)あちたまの年の終りに成ること
 雪も我が身も降りまさりつゝ
(古今五)風ふけは落つる紅葉水清み
 散らぬ影さへ底に見えつゝ
 いたづらに往きては來ぬるものゆゑに
 見まくほとさに誘はれつゝ

れ隠格主	れ隠辭起
------	------

「ながら〇〇結句」の例

踏み分けて更にや問はん紅葉の
 降り隠してと路を見ながら
(千載十九)驚かぬ吾が心こそ憂かりけれ

れ隠格主

はかなき世を(昔)は夢と見ながら

ものから〇〇結句の例

天雲(古今十五)のよそにも人の成り往くか

さすがに目には見ゆるものから

郭公(古今三)なが鳴く里の數多有れは

なほ疎まれぬ思ふものから

れ隠格主

は

がゆゑがゆゑがゆゑ結句の例

秋(古今四)ならで逢ふこと難き女郎花

天の川原(それ)に生ひぬものゆゑ

戀(古今十一)ひすれは吾が身は影と成りにけり

さりとして人(それ)に添はぬものゆゑ

れ隠格主

がためがためがため結句の例

梅(万葉十)の花吾は散らさじあきによと

奈良なる人の來つゝ見るがね

ます(万葉三)ら男の弓未振り起こと射つる矢を

後見ん人は語り告ぐがね

蜻蛉(万葉十)羽(キ)に匂へる衣吾は着じ

君に奉(それ)さは夜も着るがね

櫻花(古今七)散りかひ曇れ老いらくの

來んと言ふなる路まがふがに

山里(拾遺二)に知る人もがな郭公

鳴きぬと聞か(それ)は告げに來るがに

の 是 起 主 格 隠 格 主 起 辭 隠 格 主

なぞやうに、その格例證徴まさに古典に詳かにして確然
誣ふべからず犯すべからざるの定則たり

結句格

所作結句		疑問結句		物名結句		接續結句																																																										
作用動詞		疑代名詞		實名詞		接續格の詞																																																										
存在動詞		何		櫻		櫻																																																										
形状動詞																																																																
老	ゆ	何	なぞ	櫻	物	なぞ	○	往く	まじ	吹く	なかれ	往き	てよ	咲き	なん	見	しが	往か	ばや	知る	らめや	可き	かは	事	かも	見る	かな	事	はや	詫ぶ	とよ	爲	にや	事	とど	有りき	とぞ	義理	にぞ	頃	ぞ	往く	らし	往く	らん	降	る	讀	む	逢	ふ	立	つ	臥	す	く	う	る	ゆ					
老	ゆ	何	なぞ	櫻	物	なぞ	○	往く	○	吹く	○	往き	○	咲き	○	見	○	往か	○	知る	○	可き	○	事	○	見る	○	事	○	詫ぶ	○	爲	○	事	○	有りき	○	義理	○	頃	○	往く	○	往く	○	降	○	讀	○	逢	○	立	○	臥	○	す	○	く	○	う	○	る	○	ゆ
老	ゆ	何	なぞ	櫻	物	なぞ	○	往く	○	吹く	○	往き	○	咲き	○	見	○	往か	○	知る	○	可き	○	事	○	見る	○	事	○	詫ぶ	○	爲	○	事	○	有りき	○	義理	○	頃	○	往く	○	往く	○	降	○	讀	○	逢	○	立	○	臥	○	す	○	く	○	う	○	る	○	ゆ
老	ゆ	何	なぞ	櫻	物	なぞ	○	往く	○	吹く	○	往き	○	咲き	○	見	○	往か	○	知る	○	可き	○	事	○	見る	○	事	○	詫ぶ	○	爲	○	事	○	有りき	○	義理	○	頃	○	往く	○	往く	○	降	○	讀	○	逢	○	立	○	臥	○	す	○	く	○	う	○	る	○	ゆ

なほ右の系線表圖を簡約にことと起句と結句との照應
 掛け合はせの機轉變化の格法を一目辨知せしめん左の
 如し

花 木 是 月 時 人 彼 吾 女 神 口 心 風

は が
も の

散 櫻 何 見 頃 往 往 往 起 有 言 思 寒
り つ (ナリ) ぞ ぞ ぞ くら らん くらん くる 有 り は ず ひ き し

花 木 是 月 時 人 彼 吾 女 神 口 心 風

ぞ が
や の

○ 櫻 ○ ○ ○ 往 往 往 起 有 言 思 寒
○ (ナル) ○ ○ ○ くら らん くらん くる 有 り は ぬ ひ き し

花 木 是 月 時 人 彼 吾 女 神 口 心 風

こ
そ

○ 櫻 ○ ○ ○ 往 往 往 起 有 言 思 寒
○ (ナレ) ○ ○ ○ くら らん くらん くれ れ 有 れ は ぬ ひ し け

主格名詞

前章第十六號の動詞法第二則に於ける照應法の條にも示し、如く句意照應法の學理を啓發して照應法を

句調照應法

句意照應法の二類に大別して「語氣調節」の輕重に據りて照應の格を正すものと「句義文意」の主賓等界級等に據りて照應の格を正すものとの差異辨別を詳かにせるは實に空前絶後の一新發明たり 藝臣が積年の苦學思ふべし 實に本編講義録をもて嚆矢とす

- 句意照應法
- 句調照應法
- 主格照應法
- 敬語照應法
- 接續照應法
- の三類とす

第一款 主格照應法

主格照應法とは一章句中「が」の起句は起句を起句こそ起句の四つの起句のうち文意の歸する上に本然だ

つ主格名詞と副性だつ主格名詞との等差配置を辨別すべき一定の法則を指す さらばこれを細別して

- 本主格照應
- 副主格照應

の二種とす

第一目 本主格照應

本主格照應とは一章句中「が」の起句たる主格名詞とは起句以下の起句たる主格名詞とが章句中重複なれる時その本然だつ權力を有せるがの起句たる舉止主格の名詞をいふ

たゞその章句中は起句以下の起句のみにてがの起句無き時には起句以下の起句といへども本主格と

く種く、その學理、いまだ片生りにして更に筋立たず何となれば詞の玉緒に説き用されしにために據りて句義を深るときは、古歌の意味を解釋するに、まゝ、義理を取り違ふるふし、多く、解しあやまつなち、紛からざればなり、不都合と謂ふべし、これ子か舊式を破り新式を立て、學理の業味を正さるを得ざるは、道のため止む能はざるの勢ひなり、棄ておけざるの務めなり、ゆゑに從來世に在り購れたる語學書新刊の文典どもは、なべて杜撰粗雑一つも見るに足らざる物のみとせば言ふなり

成ること常に有りと知るべし 然る場合にははもそや
 こそともた格の輕重の別を問はずたゞ文意句義の重
 く係かる名詞が本主格と成るものと心得べし
 たとへば

今日は人が來にける
 今宵も月が朗けし
 今朝は風の寒きかな
 彼も友の戀ひとき
 これと同じ品を彼が持ちて居る
 明日や雨が止みぬらん
 この園にこそ鶯の鳴きぬれ
 この學科こそ彼が得意なれ

などやうの「人が月が風の友の彼が雨が鶯の彼が」のごと
 く「がの」の靈辭が語尾に添はりたる本然だつ擧止主格を
 指すなり またはも起句以下の各起句が本主格と成りた
 るは たとへば

今日ぞ人は來にける
 山里も花や咲きける
 彼は時こそ得つれ

などやうの「人は花や彼は」のごとく起辭格の輕重を擇ば
 ず意味の主と係かる主格名詞を指すなり

第二目 副主格照應

副主格照應とは一章句中「がの起句たる主格名詞とはも
 起句以下の起句たる主格名詞」とが章句中重複なれる時

その副性だつ無權力なるは起句以下の各主格の名詞をいふ

たゞ、またその章句中は起句以下の起句のみにて
がの起句無き時には起句以下の起句中副性だちの
起句が副主格と成るものと知るべし 然る場合には
はもそやこそどもに格の輕重の別を問はずたゞ文意
句義の輕く傍らだつ名詞が副主格と成るものと心得べ
し

たとへは

今日は人が來にける

今宵の月が朗けし

今朝は風の寒きかな

彼も友の戀ひしき

これと同じ品を彼が持ちて居る

明日や雨が止みぬらん

この園にこそ鶯の鳴きぬれ

この學科こそ彼が得意なれ

なぞやうの「今日は今宵も今朝は彼も品を明日や園に

こそ學科こそ」のごとく「はもはもそやこそこそ」の靈辭が

語尾に添はりたる本然だつ主格を指すなり または起

句以下の各起句が副主格と成りたるは たとへは

今日を人は來にける

山里も花や咲きける

彼は時こそ得つれ

なごやうの「今日ぞ山里も時こそ」のごとく起辭格の輕重を擇はず意味の傍らなる主格名詞を指すなり
 さて前章各條に説き示せる本主格と副主格との差異辨別を(先聲の語學大家が未だ會て言はざる學理にて聲臣がはじめて啓蒙せし學理なれば訝かりて受け引くまじき聲も有りぬべきに辨り)今その格例證を古典の古歌にもとめて初學生の惑ひを解かんとす

主格名詞の本副配置照應法の證歌

「はも起句とがの起句とが重なれる本副主格」の例

(後撰三) 春霞たちて雲居に成り往くは

雁の心のかはるなるべし

(後撰四) 天の川水まさるらと夏の夜は

流るゝ月のよそむ間も無と

(後撰十四) 白雪の今朝は積れる思ひかな

逢はで經る夜の程も經なくに

(古今六) 三芳野の山の白雪ふみわけて

入りにし人の音信もせぬ

「そや起句とがの起句とが重なれる本副主格」の例

(古今七) 青柳の糸よりかくる春もそ

亂れて花の綻びにける

(古今十七) 大方は月をもめでしこれぞこの

積れは人の老いと成るもの

(古今一) 春日野の若菜摘みにや白妙の

袖ふりはへて人の往くらん

絶えず往く飛鳥の川のよどみなほ

心有り^{副主}とや^{本主}人の思はん

雪とのみ降るだに有るを櫻花

いかにせよと^{副主}か風の吹くらん^{本主}

命だに心にかなふものならは

何か^{副主}別れの^{本主}かなと^{副主}からま^{本主}

こそ起句とが起句とが重なれる本副主格の例

紅葉を然こそ嵐の拂ふらぬ

この山本も雨と降るなり

なきあとの面影をのみ身に添へて

然こそは人の戀ひとかるらぬ

はもぞやこそ各起句あひ重なれる本副主格の例

吾が戀ひはゆくへも知らず果ても無と

逢ふを限りと思ふはかりぞ

君が代は限りも有らじ長濱の

真砂の数はよみつくすとも

こりすまにまたも憂き名は立ちぬべと

人にくからぬ世にら住まへは

故郷の雪は花とを降りつもる

眺むる吾も思ひ消えつゝ

いさゝめに時まつ間にそ日は経ぬる

心はせをは人に見えつゝ

女郎花吹き過ぎて来る秋風は[△]

目には見えぬ香こそあるけれ[△]

君をのみ思ひこもちの白山は[△]

いつかは雪の消ゆる時ある[△]

世の中は何か常なる飛鳥川[△]

昨日の淵を今日は瀬になる[△]

鶯の昔を戀ひて轉るは[△]

木傳ふ花の色やあせたる[△]

水鳥の玉藻の床の浮き枕[△]

深き思ひは誰かまされる[△]

あふ坂の關をや春も超えつらん[△]

音羽の山の今朝は霞める[△]

大原や小鹽の山も今日こそは[△]

神代の事も思ひ出づらめ[△]

故郷と成りにと奈良の都にも[△]

色はかはらず花は咲きけり[△]

衣手を今朝は濡れたる思ひ寝の[△]

夢路にさへや雨は降るらん[△]

山里は冬を淋しさまさりける[△]

人目も草も枯れぬと思へは[△]

(古今十八) 知り[△]にけん聞きても厭へ[△]世の中は[△]

浪のさわぎに[△]風ぞま[△]くめる[△]

(万葉八) 吾[△]が宿の萩の下葉は[△]秋風も[△]

いまだ吹かねは[△]斯くぞも[△]みでる[△]

(拾遺二) 近くて[△]ぞ色は[△]まさされる[△]青柳の[△]

糸は[△]よりて[△]ぞ見る[△]べかりける[△]

上に講述せる主格照應法中「が」の起句とは「起句以下の起句とが重なる時は、が」の起句が本主格と成る照應法とまた「が」の起句無きときは、は」起句以下の各起句互に意味の重く係かる名詞が本主格と成る照應法とを圖式にさと示し一目瞭然たらしむる左のごとし

前章第十八號の起結照應法第二款に於ける句意照應法の條にも示し、如く句意照應法中主格照應法を

本主格
副主格

の二種に類別し「句義文意」の主賓專界接觸等に據りて照應の格を精確に正しまたこの甲圖、乙圖にその句脈圖式を意匠し以て起結照應の法を秩然たらしめ語法學理の濶奥を極めたるは予が千古未發の一新發明なり

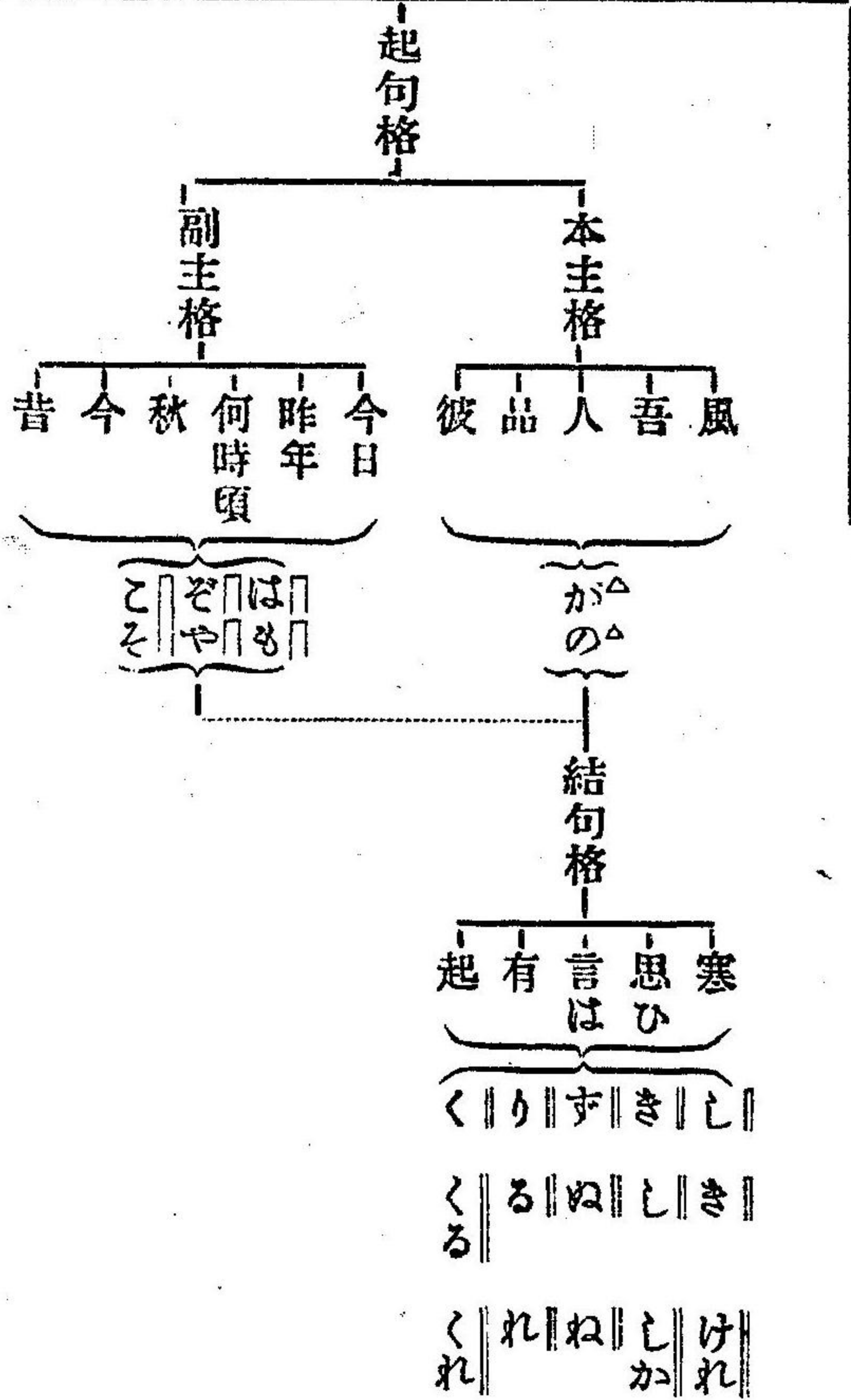
從來の語學書新刊の文典等の舊式には斯の如き圖解一つも有る事無し實に本編講義録を以て嚆矢とす

本編本號に次々語法學理の濶奥秘訣を一々精密なる圖解を意匠し文典辭書上に一大至徳を興へ國語

甲圖

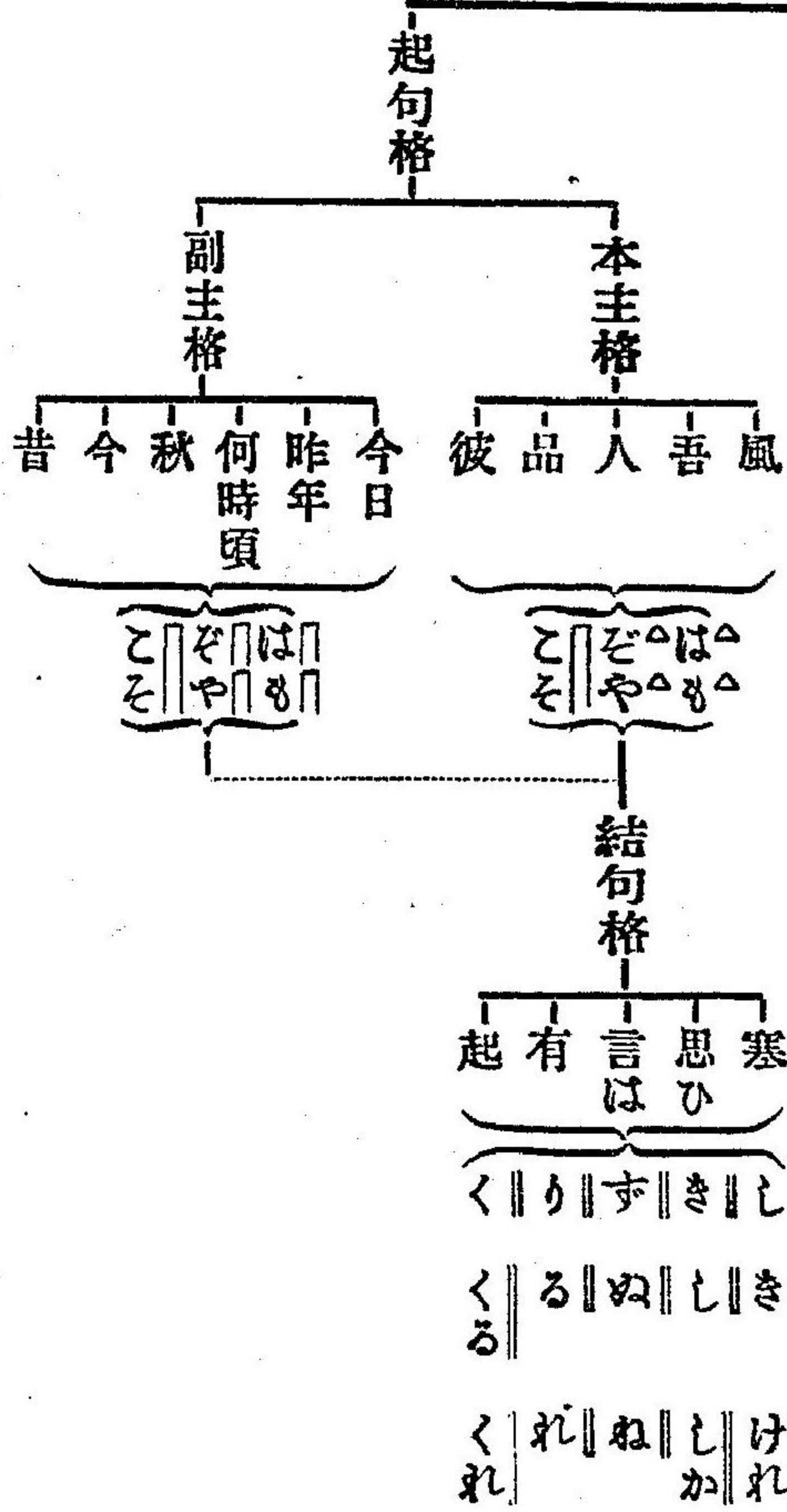
「が」の起句とは「起句とが重なる時は、が」の起句の名詞が本主格と成る。

主格照應法



學科に未嘗有の發達進歩を啓蒙せしは徳臣が我日本帝國の爲に海外に誇らざるを得ざるなり

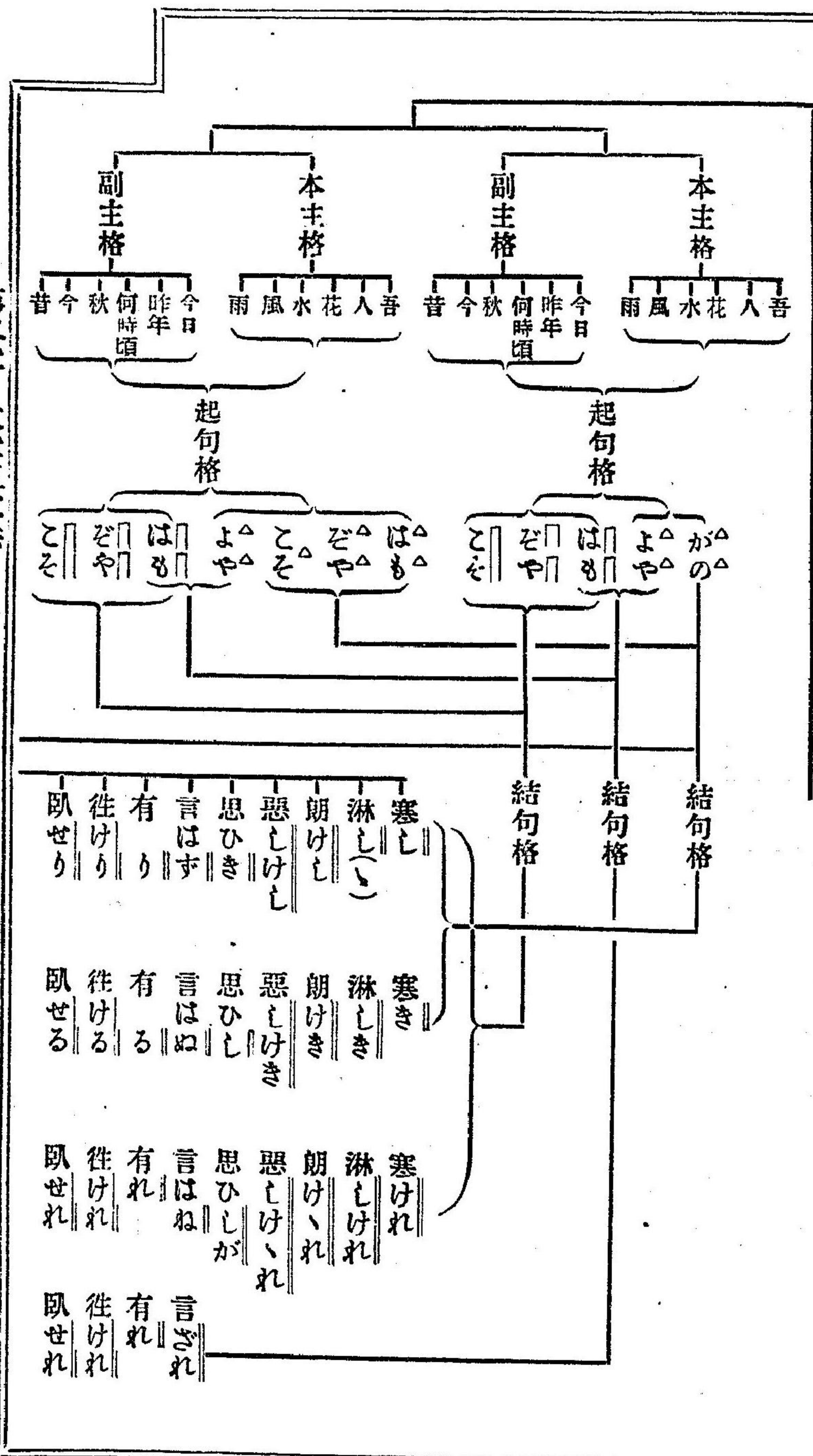
乙圖



「が」の起句無きときは、はも起句以下の各起句互に意味の重く係かる名詞が、本主格と成る。

なほ主格、照應法甲乙の圖式を、あひ合はせ結句格全体に涉りて一目その「本主格と副主格と」の照應掛け合はせの系統を詳かに通觀せしむる左の如し。

句意照應法—起句格(主格名詞)



大君は高殿に御坐す
 大臣は殿に在す
 若宮は御所に御坐がる
 北の方を茸狩に出でおはする
 宮も今宵はもはや大殿ごもりおはとます
 御子は野に坐す
 若君は御獵に出で立たす
 父帝は院に冬籠爲す
 女御はよもすがら月を見ます
 上には御園に花を御覽はす
 姫君を御歌遊はす
 君は臣下に物を給ふ

宮は人に御歌を給はする
 若殿は學校に學問を勉強せとす
 御自ら彼へ御書を與へられつ
(后は)
 御簾をかへけて雪を御覽せらるゝ
 上を今日問はせらるゝ
 上様は今日御遊覽せさせらるゝ
 君も事を知りたまふ
(后は)
 御前に御歌合爲させたまふ
 御自ら人に教へしめたまふ
 諸君よ一言申すから御耳を貸したまへ
 尼君はいみじう行ひ澄まさる
 などやうに「大君は大臣は若宮は北の方を宮も御子は